

10 道路状遺構

SX 1 (第172図、PL.30)

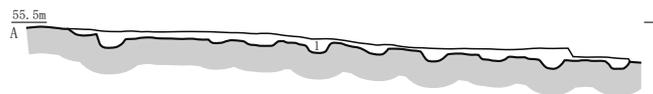
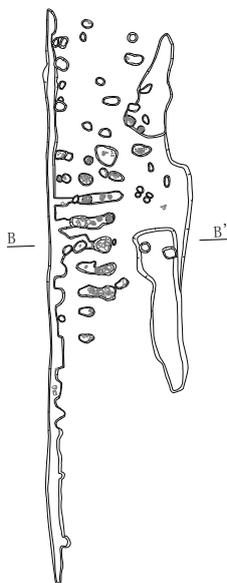
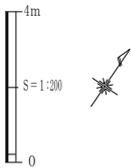
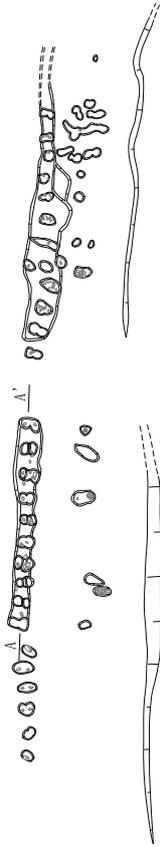
3区西側のU6・U7・V6・W3～5・X3グリッドにあり、標高54.0～57.5mの傾斜地に立地する。

波板状凹凸面を伴う道路遺構である。遺構上部は圃場整備により削平され、遺存状況は悪い。そのため、本来は一本の道路であったものが、大きく3つに分割されている。

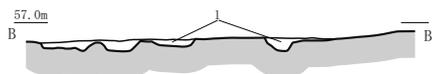
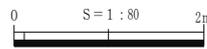
標高の高い尾根上平坦部側(東側)を切土して平坦面を確保し、側溝や凹凸面を設けている。凹凸面を構成する土坑は、平面形が楕円形・瓢箪形・円形を呈し、約0.6m間隔で配列する特徴がある。道路幅員は最大で4m、検出総延長45m以上を測り、直線道路である。

凹面の土坑底には小円礫が充填するものが多く、凹面埋土は硬くしまった単一の土層である。

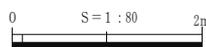
遺物は器種不明の須恵器破片が出土しているが、出土遺物から明確に時期を比定することはできない。ただし、東側に隣接する堀SD1と並列する位置関係から、同時期中世に帰属する可能性が高いと考えられる。



1 明褐色シルト(7.5YR5/6) しまりあり 比較的均質



1 明褐色シルト(7.5YR5/6) しまりあり 比較的均質



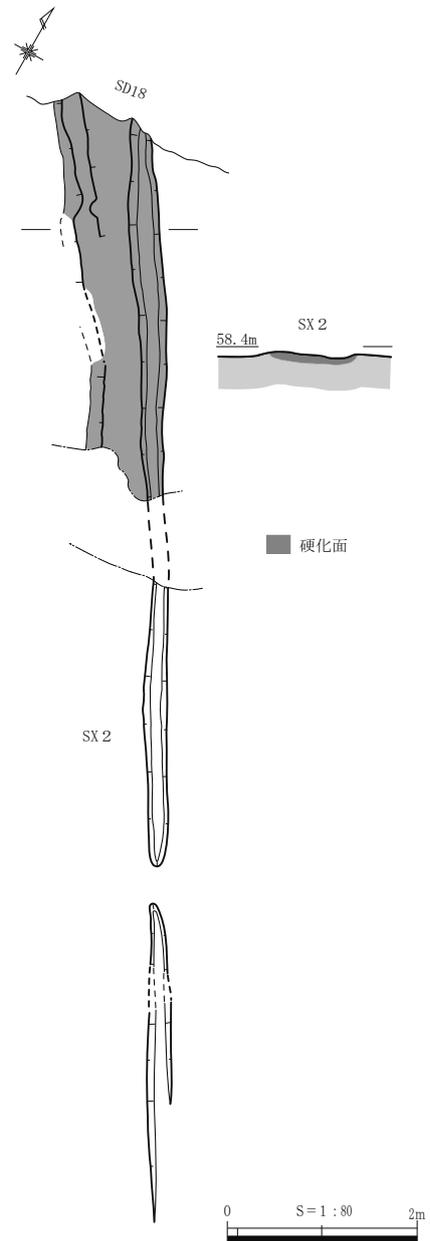
第172図 SX 1

SX2 (第173図)

3区の南東部にあり、標高58.4mの平坦面に立地する。SD18に後出する。

南北に直線状に伸びる道路遺構と考えられ、検出した長さは12m以上で、削平により遺存状態が悪い。幅は1m前後と考えられる。東側には、幅30cm、深さは5cmほどの側溝が付設される。西側についても本来側溝が存在したと考えられるが、削平のためか遺存していない。北半は側溝間、および側溝の底面に硬化面がみられる。

遺物は出土していないが、本道路はSD18に後出していることから、15世紀から16世紀以降の道路状遺構と考えられる。

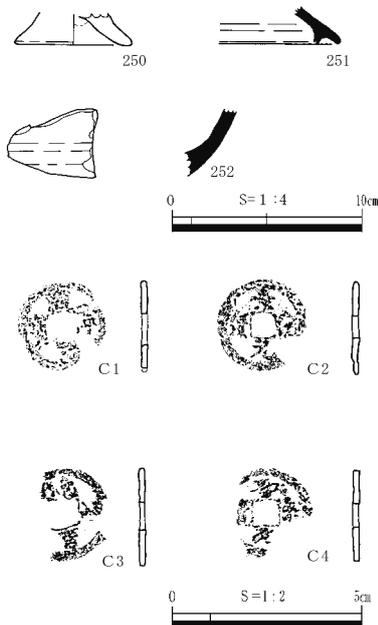


第173図 SX2

SX4 (第174・175図、PL.31・52・73)

1区北側のY1・2、Z1・2、a3・4グリッドにあり、標高48.5～53.5mの斜面部を斜めに横切るように立地する。一部が消失しているのは、削平されたものと考えられる。Z2グリッドでSD7が本遺構を切る。また、東側にはSB16、SK59、SS1が隣接する。

長さは36.56m、幅は0.48～1.40m、深さは最大0.36mを測る。主軸はほぼ北東-南西方向であるが、東側部分では、東-西方向へ分岐している。遺構底面は、平面が不整形な土坑が連続する、いわゆる波板状凹凸面を呈する。これらの土坑は、大きさも様々であり、意図的に造られた印象は受けない。なお、東側の分岐している部分では、底面が硬化している箇所があった。



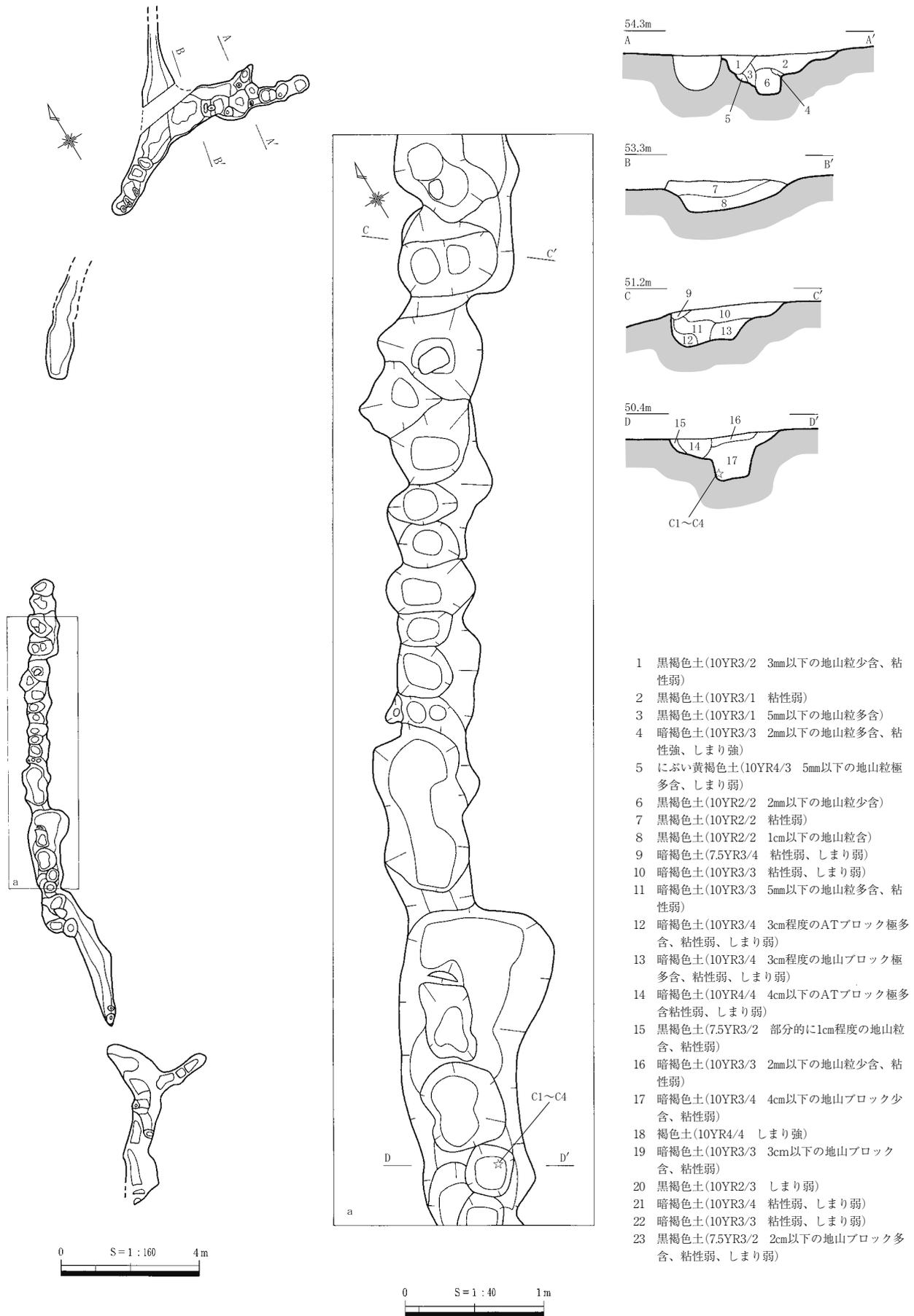
第174図 SX4 出土遺物

所があった。

埋土は、粘性の弱い暗褐色を中心とし、しまりが弱い。C-C'の断面では埋土を掘り込んだ痕跡があることから、埋没後に再度掘り込まれたと考えられる。

遺構底面付近から、須恵器類や古銭が出土している。250は土師器低脚坏、251は須恵器坏蓋、252は須恵器坏身である。250は古墳時代前期、251・252は7世紀ごろのものと考えられ、いずれも混入したものである。その他、欠損や摩滅が著しいが、C1は熙寧元寶、C2は景德元寶、C3は元豊通寶、C4は聖宋元寶である。聖宋元寶が1101年に初鑄であるが、そのほかの古銭は初鑄が11世紀である。

遺構の時期を示すものは銭貨であり、出土遺物から判断する



第175図 SX4

と、中世に位置づけられる。

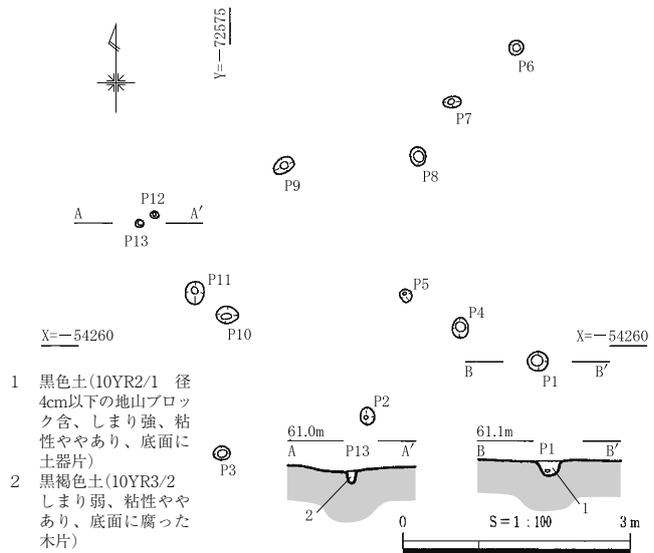
形態的特徴から、本遺構は西側斜面を登る道であったと考えられ、3区に集中する中世の遺構群と一連のものと考えられる。

11 ピット群

ピット群1 (第176・177図、表24・PL.52)

4区南東のB11・12グリッド、標高60.5～60.9mに立地し、近接してSK7が存在する。計13基のピットで構成されている。

埋土は黒色土、黒褐色土、褐色土、黄褐色



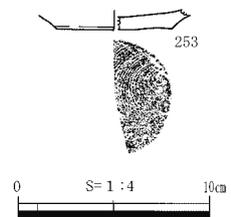
第176図 ピット群1

表24 ピット群1ピット一覧表

ピット番号	規模 (長軸×短軸-深さ) cm	備考
P1	27 × 24 - 18	土師質土器
P2	24 × 21 - 17	
P3	23 × 16 - 20	
P4	26 × 20 - 11	
P5	18 × 14 - 14	
P6	19 × 18 - 11	
P7	24 × 16 - 10	
P8	24 × 19 - 13	
P9	30 × 22 - 11	
P10	29 × 20 - 9	
P11	28 × 22 - 18	
P12	7 × 6 - 17	
P13	9 × 8 - 12	木片 (杭?)

土である。柱痕等は確認できなかった。

遺物はP1から土師質土器坏253が、P12・13からは杭と思われる木片が出土している。



第177図 ピット群1出土遺物

252は八峠編年中世Ⅲ期に相当し、P1は13世紀から14世紀ごろのものと考えられ、その他のピットも同様に中世に属するものと考えられる。建物を構成するようなピットの配列ではないが、一部のピットが列状になっており、柵などとなる可能性がある。

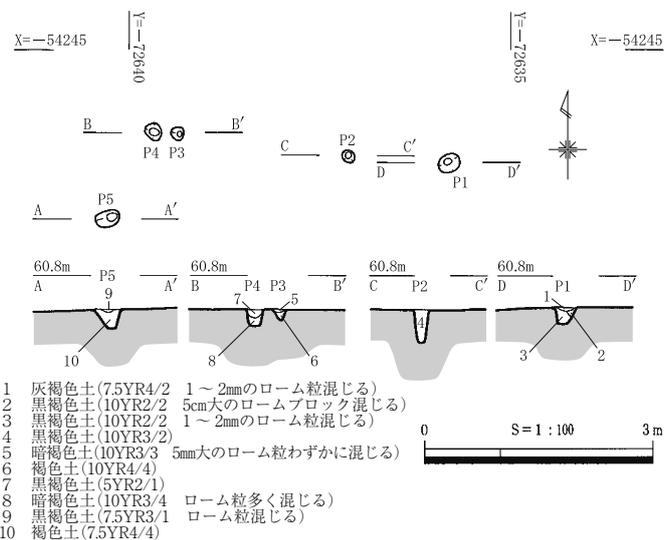
ピット群3 (第178図、表25)

4区南側のF10グリッドにあり、標高60.4m付近のほぼ平坦面で検出された。計5基のピットで構成される。周辺は、ハードローム層まで削平を受けており、遺存状態は悪い。

建物や柵列を構成する配列とはならない。

埋土は、黒褐色土が主体となっている。柱痕等は確認できなかった。

遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明



第178図 ピット群3

表25 ピット群3ピット一覧表

ピット番号	規模 (長軸×短軸-深さ) cm	備考
P1	29 × 24 - 9	
P2	18 × 15 - 22	
P3	16 × 15 - 15	
P4	23 × 19 - 14	
P5	32 × 23 - 11	

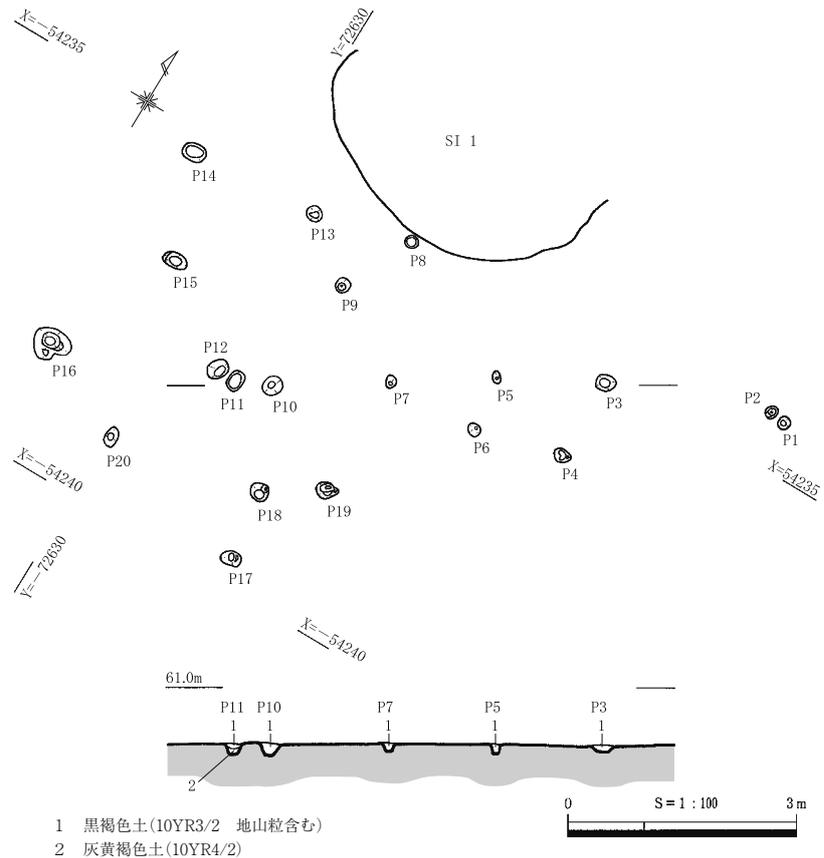
であるが、周辺の遺構のあり方から中世ごろのものと考えられる。性格は不明である。

ピット群4 (第179図、表26)

4区南東側のE9・10、F9・10グリッドにあり、標高60.3m付近のほぼ平坦面で検出された。計20基のピットで構成される。周辺は、ハードローム層まで削平を受けており、遺存状態は悪い。

P3・5・7・10が一直線に並ぶ。柱穴間距離は、P3-P5間から順に、1.4m、1.4m、1.5mである。

埋土は、黒褐色土単層が主体である。柱痕等は確認できなかった。



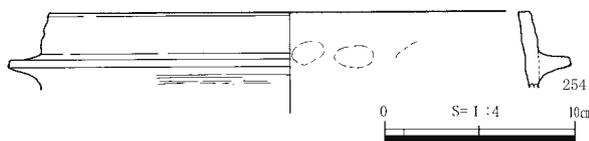
第179図 ピット群4

表26 ピット群4ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ) cm	備考	ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ) cm	備考
P1	22 × 18 - 9	土器片	P11	29 × 21 - 14	
P2	18 × 16 - 13	土器片	P12	30 × 21 - 24	
P3	26 × 22 - 10		P13	22 × 19 - 7	
P4	23 × 16 - 10		P14	30 × 22 - 12	
P5	14 × 10 - 13		P15	32 × 20 - 32	
P6	19 × 16 - 9		P16	50 × 36 - 38	
P7	16 × 14 - 10		P17	27 × 21 - 34	
P8	- 10		P18	27 × 22 - 12	
P9	21 × 16 - 20		P19	32 × 24 - 9	
P10	28 × 27 - 16		P20	26 × 17 - 18	土器片

P1・2・20埋土中で土器片が出土しているが、図化することはできなかった。

詳細な時期は不明であるが、遺物から中世ごろのものと考えられる。性格は不明であるが、P3・5・7・10は等間隔に直線的に並んでおり、柵などの施設である可能性がある。



第180図 ピット群6出土遺物

表27 ピット群6ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ) cm	備考
P1	23 × 15 - 16	
P2	32 × 27 - 27	羽釜片
P3	25 × 23 - 58	
P4	21 × 18 - 20	
P5	28 × 20 - 37	
P6	28 × 22 - 29	
P7	26 × 18 - 20	
P8	29 × 23 - 40	
P9	24 × 22 - 18	
P10	28 × 28 - 32	

ピット群6 (第180・181図、表27、PL.52)

4区南側のI9・10グリッド、標高58.1～59.0mの平坦面から谷部へかけての斜面に立地する。計10基のピットで構成されており、建物を構成するピットの配列を確認できなかったため、ピット群とした。

埋土は黒褐色土、黒色土を主体とする。柱痕等は確認できなかった。

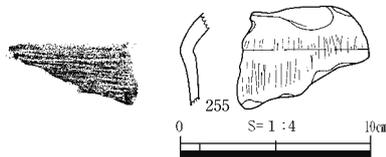
P2から瓦質土器羽釜254が出土している。

253は、八峠編年中世IV～V期に相当し、P2は、14世紀から15世紀前半に位置づけられる。その他のピットもP2と埋土が似ることから、中世に属するものと考えられる。性格は不明である。

ピット群7 (第182・183図、表28、PL.52)

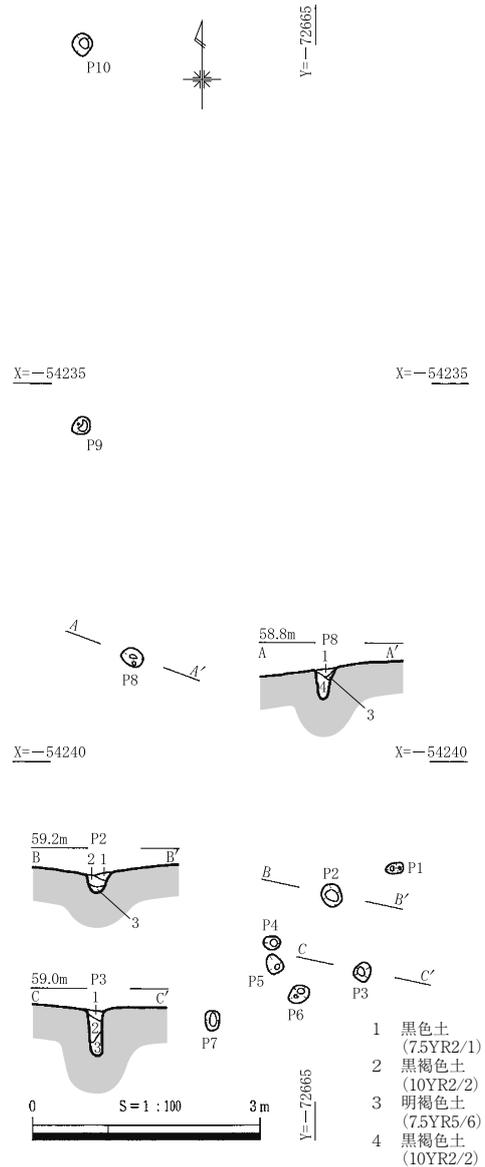
4区中央やや西側のI8、J7～9、K7グリッドにあり、標高57.4～58.0mの緩斜面に立地する。SD14・15・19に囲まれた谷の埋土中で検出した。計33基のピットで構成されており、建物を構成するピットの配列を確認できなかったため、ピット群とした。

埋土は黒褐色土を主体とする。柱痕等は確認できなかった。



第182図 ピット群7出土遺物

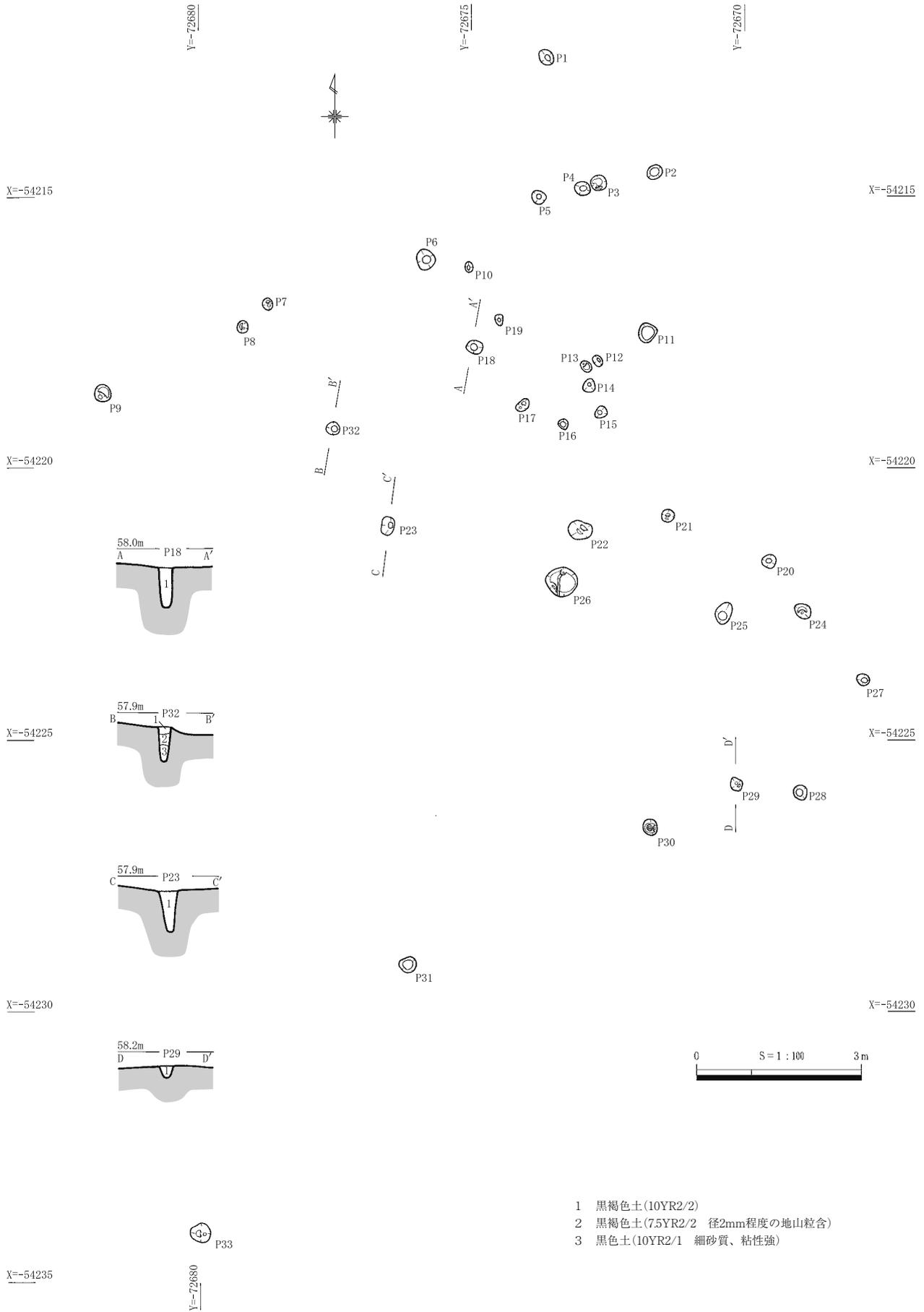
遺物はP23から土師質土器鍋255と木材、P29から土器片が出土している。



第181図 ピット群6

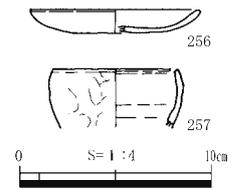
表28 ピット群7ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ) cm	備考	ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ) cm	備考
P1	30 × 25 - 45		P18	27 × 26 - 74	
P2	31 × 26 - 36		P19	21 × 15 - 43	
P3	30 × 26 - 27		P20	28 × 26 - 28	
P4	30 × 25 - 49		P21	24 × 24 - 30	
P5	26 × 25 - 38		P22	45 × 34 - 46	
P6	36 × 35 - 38		P23	33 × 23 - 78	木材(杭?)、土器片
P7	20 × 18 - 34		P24	31 × 25 - 30	
P8	23 × 17 - 35		P25	40 × 30 - 32	
P9	32 × 28 - 46		P26	58 × 53 - 24	
P10	20 × 15 - 29		P27	23 × 20 - 39	
P11	35 × 29 - 18		P28	28 × 25 - 35	
P12	23 × 18 - 28		P29	27 × 23 - 36	中世土器片
P13	22 × 16 - 26		P30	30 × 26 - 23	
P14	26 × 23 - 40		P31	32 × 27 - 9	
P15	22 × 21 - 41		P32	24 × 22 - 64	
P16	19 × 18 - 30		P33	37 × 28 - 37	
P17	27 × 17 - 30				



第183図 ピット群7

254は、八峠編年中世Ⅲ期に相当し、13世紀から14世紀初頭と考えられる。ピット群7は、出土遺物及び層位から、中世以降に属するものと考えられる。性格は不明である。



第184図 ピット群8
出土遺物

ピット群8(第184・185図、表29、PL.52)

4区I5・6、J4・5、K3～5、L4グリッド、標高56.9～57.8mに立地する。

計59基のピットで構成されており、建物等を構成するピット配列は確認できなかった。埋土は黒褐色を主体とし、地山粒を含むものが多い。P5・6・8・13・29・31は土層断面において柱痕跡を確認しており、柱穴の可能性がある。柱径は10～15cmとなる。

遺物はP6から土師質土器、P26・29から焼塩土器が出土した。そのうちP6出土の土師質土器皿256とP26出土の焼塩土器257を図化した。

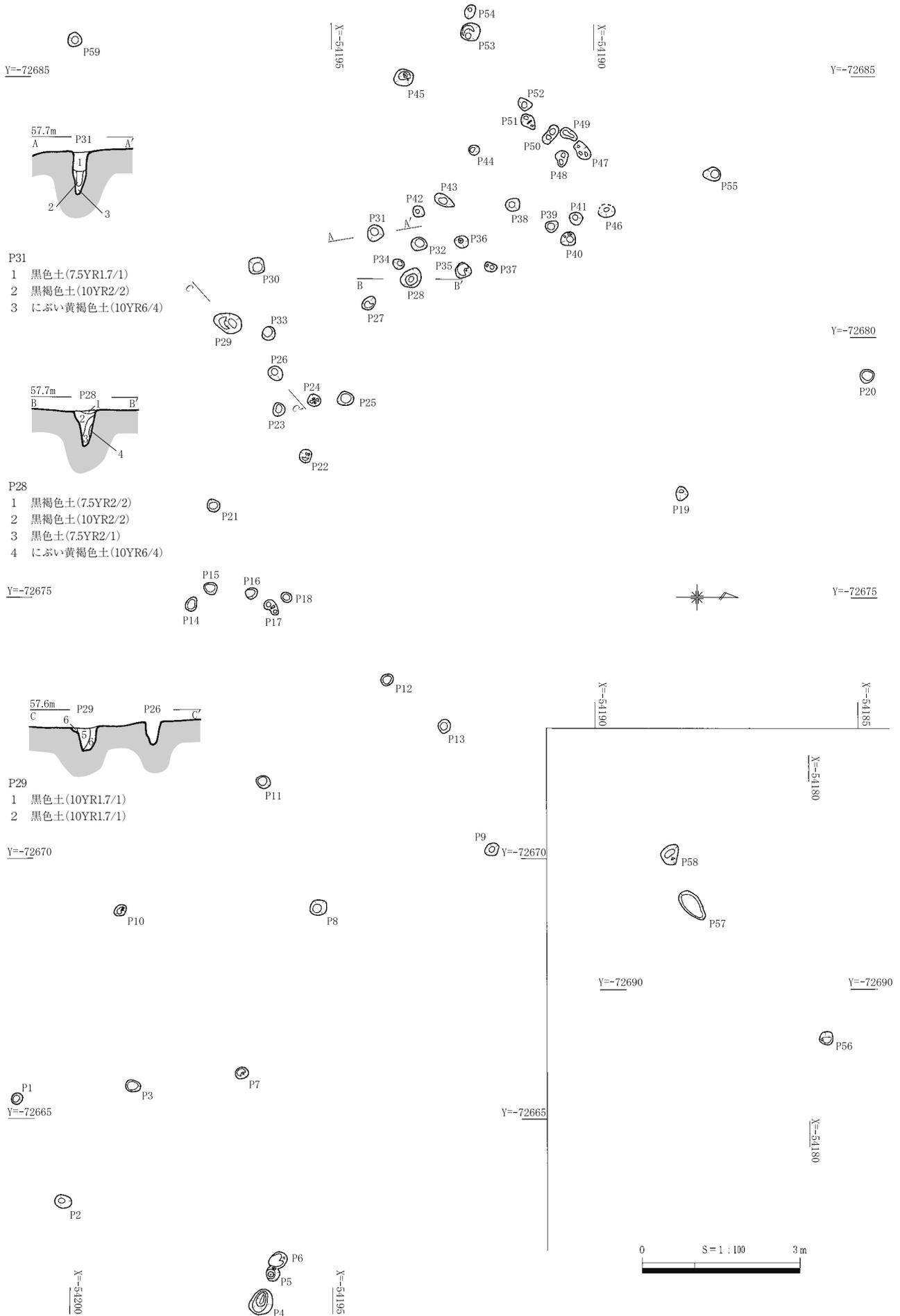
255は、八峠編年中世Ⅳ期に相当し、P6は13世紀から14世紀初頭のものと考えられる。その他のピットもP6の埋土に似ることから、同様に中世に属するものと考えられる。なお、257は古代のものと考えられ、混入したものである。性格は不明である。

ピット群10(第186・187図、表30、PL.54)

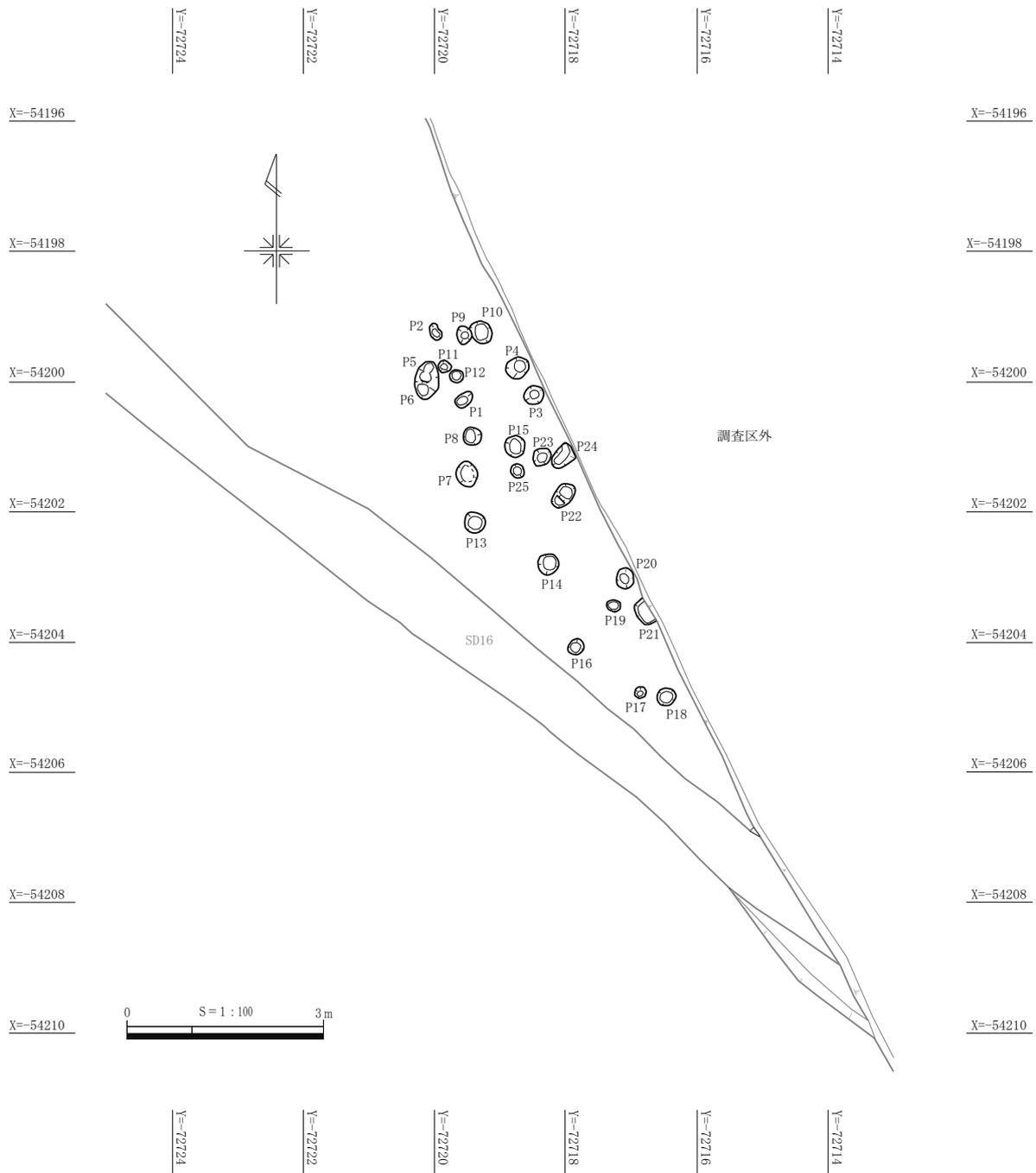
3区東側調査区際のO5・6、N5・6グリッドにあり、標高57.0～57.1mの緩やかな斜面に立地する。

表29 ピット群8ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ) cm	備考	ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ) cm	備考
P1	22 × 18 - 37		P31	33 × 31 - 66	柱痕径 10cm
P2	31 × 26 - 21		P32	31 × 26 - 20	
P3	28 × 22 - 28		P33	28 × 24 - 11	
P4	54 × 42 - 16		P34	21 × 18 - 22	
P5	29 × 25 - 18	柱痕径 12cm	P35	32 × 29 - 9	
P6	36 × 29 - 27	土器片、柱痕径 15cm	P36	26 × 25 - 14	
P7	26 × 22 - 13		P37	22 × 16 - 16	
P8	32 × 30 - 31	柱痕径 16cm	P38	28 × 24 - 63	
P9	28 × 23 - 33		P39	27 × 21 - 18	
P10	24 × 21 - 9		P40	32 × 29 - 18	
P11	25 × 24 - 12		P41	26 × 25 - 33	
P12	24 × 20 - 12		P42	25 × 22 - 27	
P13	25 × 22 - 34	柱痕径 10cm	P43	40 × 21 - 32	
P14	28 × 21 - 16		P44	21 × 19 - 57	
P15	26 × 23 - 16		P45	38 × 34 - 29	
P16	20 × 19 - 14		P46	31 × 26 - 36	
P17	35 × 16 - 16		P47	38 × 27 - 24	
P18	20 × 18 - 16		P48	33 × 29 - 68	
P19	27 × 20 - 27		P49	36 × 17 - 19	
P20	28 × 24 - 6		P50	40 × 20 - 35	
P21	24 × 22 - 20		P51	34 × 25 - 20	
P22	27 × 23 - 25		P52	28 × 21 - 35	
P23	27 × 24 - 23		P53	40 × 38 - 40	
P24	25 × 22 - 27		P54	29 × 20 - 28	
P25	31 × 27 - 39		P55	34 × 26 - 58	
P26	30 × 26 - 44	製塩土器片	P56	27 × 27 - 14	
P27	29 × 23 - 46		P57	67 × 34 - 16	
P28	41 × 35 - 66		P58	42 × 34 - 33	
P29	55 × 37 - 45	製塩土器片、柱痕径 12cm	P59	27 × 25 - 32	
P30	33 × 30 - 45				



第185図 ピット群8



第186図 ピット群10

表30 ピット群10ピット一覧表

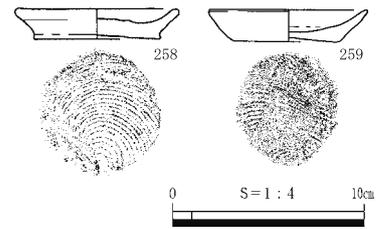
ピット番号	規模 (長軸×短軸-深さ) cm	備考	ピット番号	規模 (長軸×短軸-深さ) cm	備考
P1	18 × 28 - 41	土師質土器小皿	P14	33 × 34 - 39	
P2	15 × 27 - 19		P15	30 × 33 - 40	
P3	30 × 32 - 51		P16	20 × 25 - 22	
P4	30 × 36 - 49		P17	15 × 15 - 11	
P5	31 × 35 - 37		P18	27 × 27 - 17	
P6	27 × 32 - 46		P19	16 × 20 - 14	
P7	30 × 40 - 27		P20	27 × 32 - 52	
P8	27 × 30 - 43	柱痕径 16cm	P21	22 × 40 - 22	
P9	22 × 28 - 53		P22	25 × 42 - 44	
P10	30 × 35 - 63		P23	26 × 30 - 8	
P11	18 × 20 - 14		P24	28 × 39 - 47	
P12	18 × 20 - 36		P25	20 × 21 - 8	
P13	30 × 35 - 15				

25基からなるピットを検出したが、いずれも建物跡等を復元するにいたらなかった。

埋土は、黒褐色土系のものが多い。

P1から、土師質土器小皿258・259が出土している。

土師質土器小皿は、八峠編年中世IV期に相当し、P1は14世紀頃のものと考えられる。その他のピットも埋土などの特徴から、ほぼ同じ時期に属すると考えられる。



第187図 ピット群10出土遺物

ピット群11(第188・189図、表31、PL.48・61・65)

3区南東調査区際のM8・9、N8・9グリッドにあり、標高56.70m付近の平坦面に立地する。



第188図 ピット群11

表31 ピット群11ピット一覧表

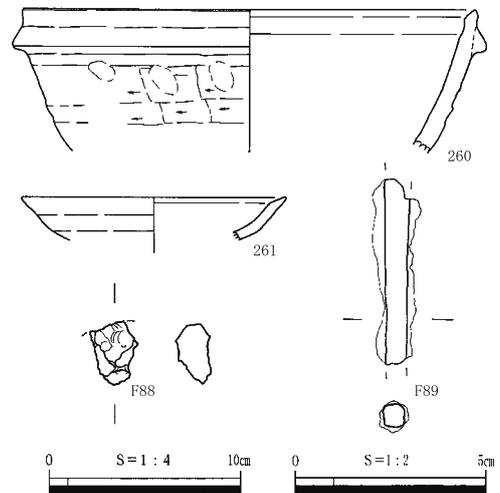
ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ) cm	備考	ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ) cm	備考
P1	37 × 35 - 18		P28	43 × 35 - 33	
P2	31 × 30 - 20		P29	19 × 18 - 74	
P3	24 × 23 - 19		P30	23 × 23 - 8	
P4	30 × 25 - 31		P31	48 × 32 - 22	
P5	29 × 27 - 25		P32	38 × 34 - 25	
P6	38 × 28 - 12		P33	27 × 24 - 27	
P7	24 × 23 - 23		P34	37 × 37 - 50	
P8	49 × 39 - 18		P35	40 × 37 - 55	
P9	29 × 26 - 11		P36	25 × 24 - 20	
P10	40 × 35 - 18		P37	43 × 42 - 33	
P11	57 × 38 - 21		P38	45 × 37 - 62	
P12	48 × 39 - 61	柱痕径 17cm	P39	29 × 29 - 26	
P13	68 × 37 - 31		P40	50 × 44 - 29	
P14	24 × 20 - 22		P41	25 × 22 - 25	
P15	44 × 40 - 20	柱痕径 17cm	P42	52 × 43 - 58	
P16	25 × 24 - 11		P43	42 × 35 - 32	
P17	27 × 24 - 16		P44	33 × 32 - 53	
P18	26 × 24 - 18		P45	25 × 23 - 26	
P19	23 × 20 - 19		P46	28 × 25 - 30	
P20	34 × 31 - 48	柱痕径 16cm	P47	34 × 30 - 36	
P21	41 × 36 - 44		P48	33 × 25 - 30	
P22	23 × 21 - 7		P49	31 × 25 - 23	
P23	50 × 41 - 46	柱痕径 21cm	P50	25 × 23 - 10	
P24	52 × 44 - 51		P51	25 × 25 - 8	
P25	38 × 35 - 55		P52	62 × 40 - 58	
P26	34 × 30 - 26		P53	39 × 22 - 19	
P27	56 × 40 - 18		P54	84 × 58 - 22	
			P55	46 × 46 - 52	

53基からなるピットを検出したが、SB12・SB18以外は建物を復元することはできなかった。

埋土は、黒褐色土系のものが多い。

P55から瓦質土器羽釜260、P54から土師質土器皿261、椀形鍛冶滓F88、鉄製棒状不明品F89が出土している。

259、260は、八峠編年中世V期に相当するものと考えられ、P54、P55は15世紀から16世紀ごろのものと考えられる。その他のピットも埋土などの特徴から、ほぼ同じ時期に属すると考えられる。



第189図 ピット群11出土遺物

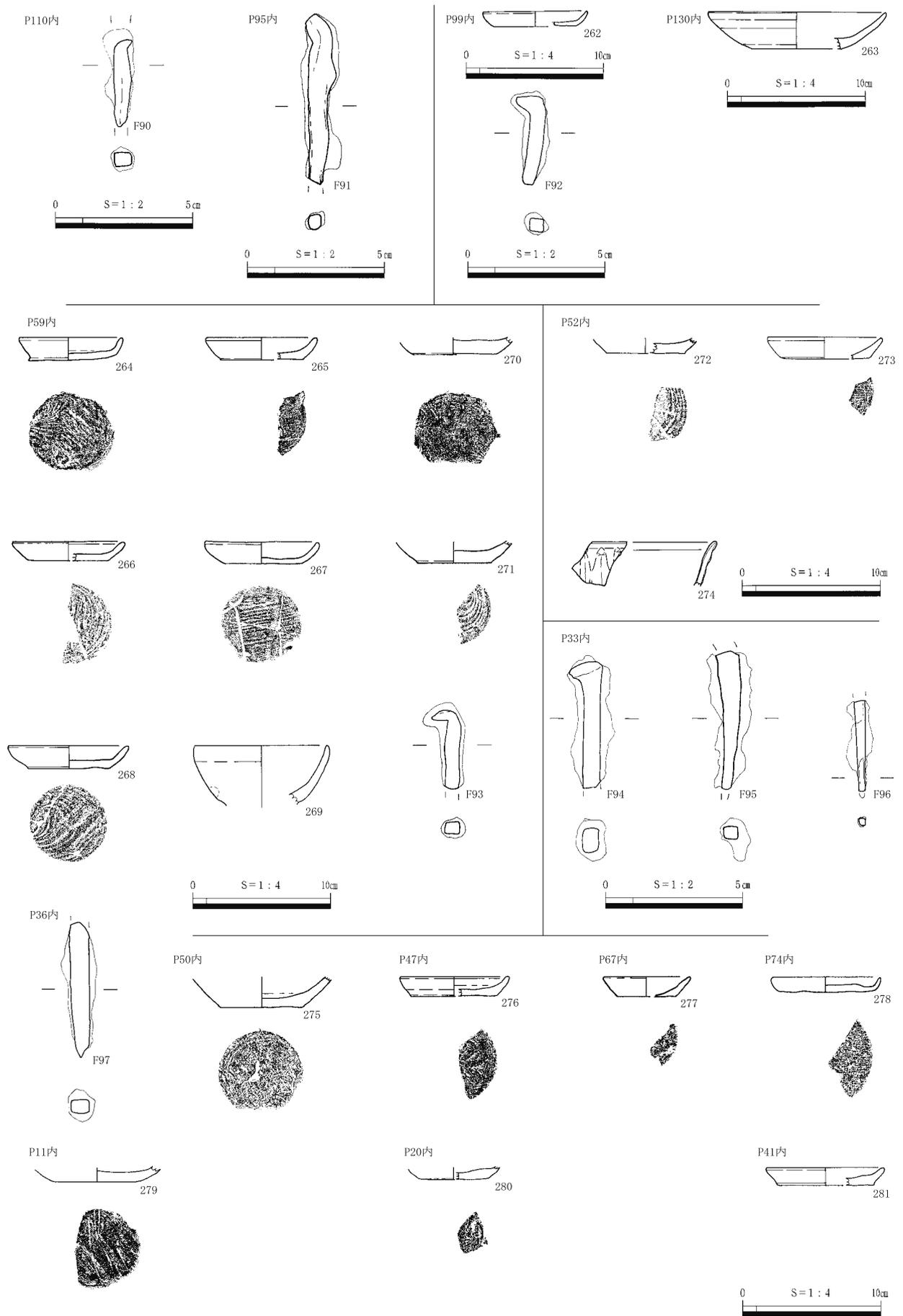
ピット群12(第190～192図、表32・33、PL.53・61)

3区北東部の調査区際一帯にあり、標高56.2～56.4m前後の平坦面に位置する。SB14、SE1周辺に密集する柱穴群で、132基からなるピットで構成される。柱穴の密集範囲はさらに北側の調査区外に広がることが予想される。

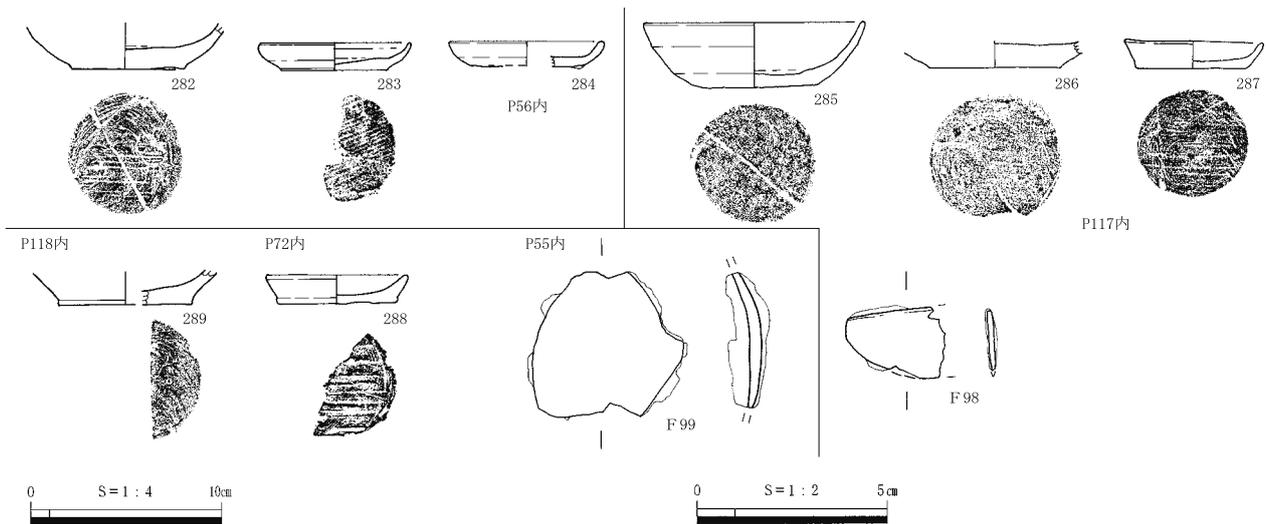
いずれのピットも平面形は円形で、規模は径20～40cm前後の小型のものと径60～80cmのやや大型のものに大別できる。深さは5～80cmと一様ではないが、底面の標高をみると、55.6～55.8m前後と56.0～56.1m前後に集中する傾向にある。柱痕跡、もしくは柱抜取痕跡を残すものが多く、柱の径は10～16cm前後に復元できる。



第190図 ピット群12



第191図 ピット群12出土遺物(1)



第192図 ピット群12出土遺物(2)

表32 ピット群12ピット一覧表(1)

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ) cm	備考	ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ) cm	備考
P1	91 × 85 - 36		P41	23 × 19 - 31	土器
P2	32 × 30 - 35		P42	38 × 23 - 36	
P3	47 × 32 - 23		P43	38 × 36 - 56	
P4	38 × 33 - 37		P44	37 × 33 - 41	
P5	77 × 64 - 18		P45	78 × 56 - 60	
P6	33 × 31 - 9		P46	23 × 19 - 19	
P7	57 × 47 - 26		P47	77 × 58 - 31	土器
P8	34 × 31 - 21		P48	71 × 57 - 22	
P9	29 × 27 - 10		P49	31 × 27 - 27	
P10	38 × 34 - 10		P50	43 × 37 - 25	土器
P11	39 × 38 - 16	土器	P51	59 × 56 - 80	
P12	36 × 29 - 7		P52	75 × 63 - 59	土器、青磁、柱痕径 19cm
P13	31 × 30 - 9		P53	30 × 28 - 35	柱痕径 18cm
P14	30 × 29 - 12		P54	32 × 25 - 13	
P15	30 × 29 - 31	柱痕径 12cm	P55	30 × 19 - 12	鉄器
P16	29 × 28 - 10		P56	45 × 38 - 63	土器
P17	43 × 41 - 58		P57	30 × 25 - 19	
P18	32 × 31 - 31	柱痕径 13cm	P58	49 × 38 - 56	柱痕径 12cm
P19	27 × 21 - 16		P59	72 × 60 - 57	土器、柱痕径 17cm
P20	76 × 62 - 27	土器	P60	25 × 19 - 5	
P21	52 × 49 - 14		P61	37 × 35 - 11	
P22	37 × 33 - 59		P62	30 × 30 - 28	
P23	33 × 21 - 26	柱痕径 14cm	P63	29 × 25 - 24	
P24	35 × 30 - 19		P64	64 × 44 - 5	
P25	43 × 29 - 13		P65	44 × 43 - 67	
P26	42 × 17 - 8		P66	46 × 41 - 11	
P27	41 × 34 - 40		P67	54 × 53 - 64	土器
P28	44 × 38 - 22		P68	37 × 33 - 55	柱痕径 14cm
P29	24 × 18 - 14		P69	36 × 33 - 57	
P30	26 × 19 - 18		P70	36 × 30 - 38	
P31	23 × 20 - 9		P71	34 × 27 - 56	
P32	27 × 20 - 28		P72	40 × 39 - 67	土器
P33	47 × 43 - 85	鉄器	P73	25 × 24 - 44	柱痕径 10cm
P34	22 × 20 - 11		P74	77 × 68 - 77	土器、柱痕径 23cm
P35	41 × 38 - 51	柱痕径 17m	P75	33 × 29 - 49	柱痕径 15cm
P36	63 × 59 - 62	鉄器	P76	96 × 86 - 16	柱痕径 20cm
P37	33 × 33 - 59		P77	41 × 41 - 67	
P38	36 × 28 - 11		P78	27 × 27 - 19	柱痕径 14cm
P39	25 × 20 - 31		P79	31 × 29 - 27	柱痕径 16cm
P40	35 × 34 - 53	柱痕径 14cm	P80	56 × 47 - 73	柱痕径 12cm

表33 ピット群12ピット一覧表(2)

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ) cm	備考	ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ) cm	備考
P81	43 × 37 - 67		P107	34 × 30 - 61	
P82	77 × 67 - 56		P108	51 × 45 - 67	柱痕径 12cm
P83	63 × 45 - 17		P109	56 × 48 - 38	
P84	77 × 23 - 26		P110	62 × 25 - 35	鉄器
P85	40 × 19 - 45	柱痕径 12cm	P111	62 × 38 - 10	柱痕径 14cm
P86	36 × 34 - 34	柱痕径 13cm	P112	45 × 37 - 56	
P87	44 × 44 - 75		P113	50 × 42 - 45	
P88	37 × 36 - 42		P114	49 × 40 - 35	
P89	21 × 19 - 15		P115	49 × 35 - 33	
P90	35 × 28 - 12	柱痕径 12cm	P116	31 × 26 - 7	
P91	28 × 24 - 38	柱痕径 7 cm	P117	28 × 25 - 7	土器、鉄器、柱痕径 14cm
P92	29 × 26 - 7		P118	67 × 59 - 64	土器
P93	46 × 41 - 48		P119	44 × 30 - 22	柱痕径 14cm
P94	29 × 26 - 16		P120	51 × 46 - 13	柱痕径 16cm
P95	43 × 39 - 14	鉄器、柱痕径 20cm	P121	46 × 41 - 73	
P96	47 × 43 - 47		P122	42 × 38 - 13	
P97	33 × 31 - 11		P123	50 × 37 - 26	
P98	18 × 13 - 13		P124	26 × 20 - 6	柱痕径 12cm
P99	26 × 16 - 11	土器、鉄器	P125	33 × 29 - 29	
P100	58 × 51 - 44		P126	33 × 31 - 18	
P101	52 × 46 - 8		P127	54 × 50 - 58	
P102	15 × 15 - 14		P128	68 × 48 - 20	
P103	36 × 25 - 9		P129	27 × 25 - 27	
P104	82 × 34 - 10		P130	75 × 72 - 31	土器
P105	34 × 30 - 20	柱痕径 12cm	P131	70 × 57 - 23	
P106	38 × 36 - 55	柱痕径 9 cm	P132	58 × 53 - 24	

図化した遺物には、P110内出土の鉄釘F90、P95内出土の鉄釘F91、P99内出土の土師質土器小皿262・鉄釘F92、P130内出土の土師質土器坏263、P59内出土の土師質土器小皿264～268、土師質土器坏269～271、P52内出土の土師質土器小皿272・273、青磁碗274、P33内出土の鉄釘F94・F95・F96、P36内出土の鉄釘F97、P50内出土の土師質土器坏275、P47内出土の土師質土器小皿276、P67内出土の土師質土器小皿277、P74内出土の土師質土器小皿278、P11内出土の土師質土器坏279、P20内出土の土師質土器小皿280、P41内出土の土師質土器小皿281、P56内出土の土師質土器坏282、土師質土器小皿283・284、P117内出土の土師質土器坏285・286、土師質土器小皿287、鉄製刀子片F98、P72内出土の土師質土器小皿288、P55内出土の鑄鉄製鍋片F99、P118内出土の土師質土器坏289がある。

遺物は土師質土器坏、小皿、鉄釘の出土が目立つ。土師質土器は柱抜取痕跡から出土している資料が多く、完形品もみられ、柱を抜き取った際に埋納されたと考えられる。鉄釘はいずれも皆折れ釘で、規格も揃っており、柱穴群からなる建物等に使用されたものである可能性が高い。274は龍泉窯系青磁坏Ⅲ類に相当する。

柱穴群が形成された時期は、出土遺物が概ね八峠編年中世Ⅲ期に相当すると考えられ、13世紀から14世紀初頭の範疇で収まると考えられる。本報告では建物の復元はSB14のみに留まっているが、本来、さらに複数の建物や柵などの施設が存在していた可能性が高い。また、周囲の遺構はその重複関係から少なくとも3時期に分けられるとみられ、建物等が継続的に営まれていた可能性を指摘できる。

12 3区その他の柱穴

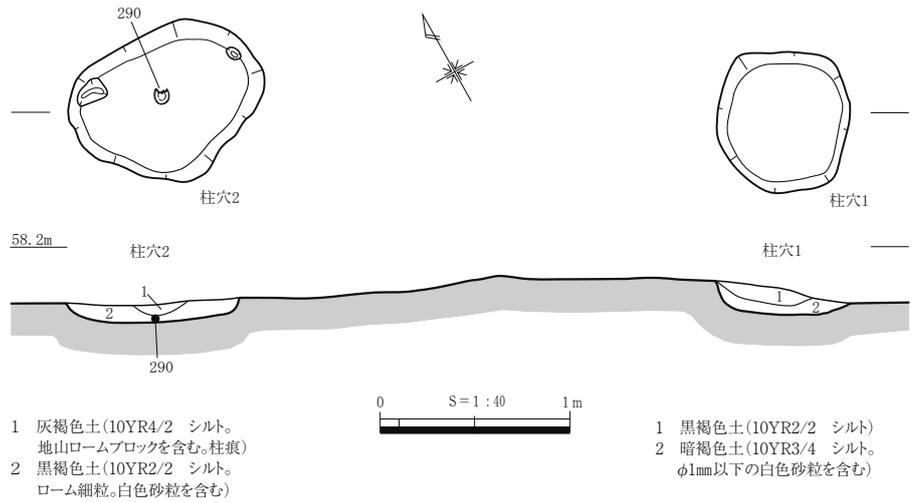
ここでは、3区において建物として復元できなかった柱穴について記述することとする。

柱穴1・2 (第193・194
図、PL.54)

3区東側のO6・P6
グリッドにあり、標高
57.9mの平坦面に立地す
る。

柱穴1は、平面形は
楕円形を呈し、長軸0.74
m、短軸0.72mを測る。

柱穴2は、平面形は
楕円形を呈し、長軸0.98



- 1 灰褐色土(10YR4/2 シルト。地山ロームブロックを含む。柱痕)
- 2 黒褐色土(10YR2/2 シルト。ローム細粒。白色砂粒を含む)

- 1 黒褐色土(10YR2/2 シルト)
- 2 暗褐色土(10YR3/4 シルト。φ1mm以下の白色砂粒を含む)

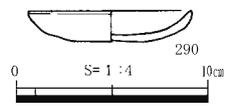
第193図 柱穴1・2

m、短軸0.73mを測る。深さはいずれも10cmほどしか遺存しておらず、周囲の他の柱穴は削平された可能性が高い。P1とP2の柱間寸法は3.3mである。

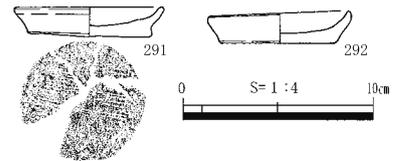
埋土はP2の1層が柱痕跡、または柱抜取痕跡の可能性はある。

遺物はP2の底面直上から土師質土器坏290がほぼ完形の状態で出土しており、柱を抜き取った後に埋納したものと考えられる。290は、底部調整が不明であるが、手づくね成形の可能性はある。

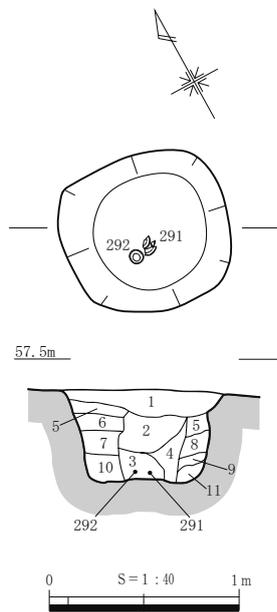
290は八峠編年中世Ⅲ期に相当し、13世紀から14世紀初頭と推定される。



第194図 柱穴2出土遺物



第196図 柱穴3出土遺物



- 1 黒褐色土(10YR2/3 シルト。ロームブロックを多く含む)
- 2 褐灰色土(10YR4/1 シルト。粘性強。ロームブロックを含む)
- 3 黒褐色土(10YR4/3 シルト。褐灰色シルトブロック、ロームブロックを含む)
- 4 灰黄褐色土(10YR4/2 シルト。ローム細粒を密に含む)
- 5 におい黄褐色土(10YR5/4 粘土質シルト。ロームブロック主体)
- 6 黒褐色土(10YR2/2 シルト。ロームブロックを含む)
- 7 黒褐色土(10YR2/2 シルト)
- 8 黄褐色土(10YR5/6 シルト質粘土。ローム土主体)
- 9 黒褐色土(10YR2/2 シルト)
- 10 黒褐色土(10YR2/2 シルト。ローム細粒を含む)
- 11 におい黄褐色土(10YR5/4 粘土質シルト。ローム土主体)

第195図 柱穴3

比較的丁寧に埋め戻されている。

遺物は、底面直上で土師質土器小皿291・292が並んだ状態で出土しており、柱抜取後に埋納されたと考えられる。

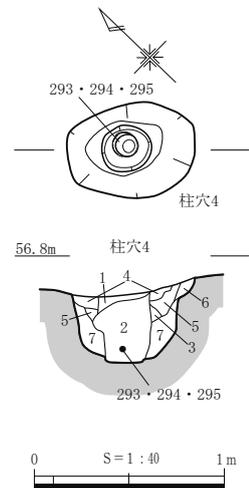
土師質土器小皿は、八峠編年中世Ⅲ期に相当し、13世紀から14世紀前

柱穴3 (第195・196図、PL.54)

3区東側のP5グリッドにあり、標高57.3mの谷地形の肩部に立地する。

平面形は隅丸方形を呈し、一辺0.88m、深さは0.48mを測る。

埋土は1～4層が柱抜取痕跡と考えられる。柱堀方埋土は、黒褐色シルト層と地山のロームブロック主体層が互層状に堆積し、比較



- 1 明黄褐色土(10YR6/6 粘質土)と黒褐色土(10YR3/2 粘土)の混濁土
- 2 黒褐色土(10YR3/2 粘土)に明黄褐色土(10YR6/6 粘質土)が混じる
- 3 黒褐色土(10YR3/2 粘土)に明黄褐色土(10YR6/6 粘質土)が混じる
- 4 明黄褐色土(10YR6/6 粘質土)に黒褐色土(10YR3/2 粘質土)が少量混じる
- 5 明黄褐色土(10YR6/6 粘質土)に黒褐色土(10YR3/2 粘質土)が混じる
- 6 明黄褐色土(10YR6/6 粘質土)に黒褐色土(10YR3/2 粘質土)が少量混じる
- 7 黒褐色土(10YR3/2 粘質土)と明黄褐色土(10YR6/6 粘質土)の混濁土

第197図 柱穴4

半と考えられる。本遺構以外に周囲から柱穴は検出されていないが、SD16から東側は近世以降の削平が著しく、本来東側に対応する柱穴が存在していた可能性は高い。

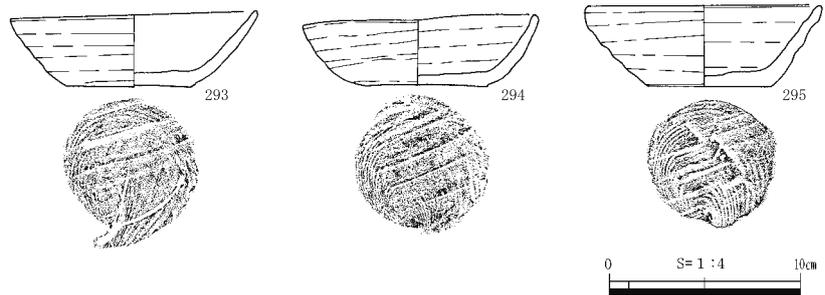
柱穴4 (第197・198図、PL.54)

3区北東側のS4グリッドにあり、標高56.6mの平坦面に立地する。

平面形は長方形を呈し、長辺1.37m、短辺0.8m、深さは0.53mを測る。底面中央には径35cmの円形の窪みがみられ、柱当りと考えられる。

埋土は1、2層が柱抜取痕跡である。掘方埋土は黒褐色シルト層と地山のロームブロック主体層で、比較的丁寧に埋め戻されている。

遺物は、底面直上から土師質土器坏が3個体(293～295)重なった状態で出土しており、柱抜取後に埋納されたものと考えられる。これらは、いずれも体部に丸みを持ち、底部に板状の圧痕が残る。



第198図 柱穴4出土遺物

土師質土器坏は、八峠編年中世Ⅲ期に相当し、13世紀から14世紀初頭と推定される。

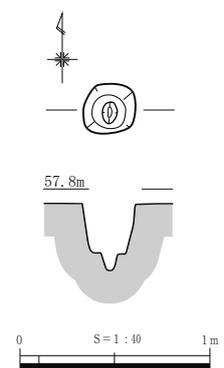
柱穴5 (第199図)

3区東側のO6グリッドにあり、標高57.7mの平坦面に立地する。

平面形は円形を呈し、径0.55m、深さ0.52mを測る。底面中央には径20cm、深さ18cmのピットがみられる。

遺物は、底面から土師質土器小皿片が出土しているが、図化できなかった。土層断面を図示していないが、柱抜取後に埋納したものと考えられる。

土師質土器小皿は、柱穴3同様、13世紀から14世紀初頭と考えられる。周囲に同規模のピットが散見されたが、規則的な並びは確認できなかった。



第199図 柱穴5

13 畑状遺構

SX3 (第200・201図、PL.31・51)

3区南東部のN7グリッドにあり、標高58.0mの谷地形へ下る緩斜面に立地する。重複関係から新SD18に先行するが、古SD18との先後関係ははっきりしない。北側は削平により遺存せず、全体の形状は不明である。東側は調査区外に延びている。

検出した長さは5.5m、幅は2.7m以上である。全体が深さ0.25mほどの掘り込みを持ち、地山面には幅20～30cmの浅い溝が南北に並列するように掘削されている。

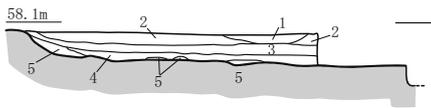
掘り込みにはローム細粒を含む黒褐色シルトが堆積し、5層に細分される。

遺物は、埋土中から土師質土器皿296、白磁碗297、瓦質土器羽釜298・299が出土している。その他

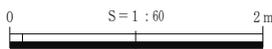


SD18

調査区外



- 1 黒褐色シルト(10YR2/3) ローム細粒、ブロックを多く含む
- 2 黒褐色シルト(10YR2/3) ローム細粒を少量含む
- 3 黒褐色シルト(10YR2/3) ローム細粒を少量含む。2より粘性強
- 4 黒褐色シルト(10YR2/3) ローム細粒を少量含む。3より粘性強
- 5 黒褐色シルト(10YR2/3) ロームブロックを多く含む

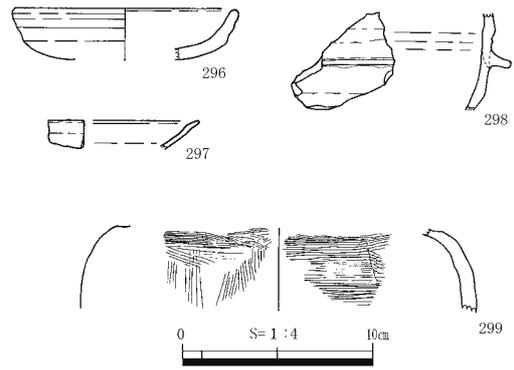


第200図 SX3

シルト混じりの灰黄褐色ロームブロックからなり、厚さは5～20cmである。

遺物は、土師質土器坏300・301、越前焼播鉢302が出土している。

土師質土器は、八峠編年中世Ⅲ期に相当し、整地された時期は、出土遺物から13世紀から14世紀初頭以降と考えられる。下層の黒褐色堆積層(5層)上面で柱穴等の遺構を検出しており、本来、整地層上面から掘り込まれていた可能性が高い。谷地形は中世段階にはほぼ埋没していたとみられるが、整地することにより地



第201図 SX3出土遺物

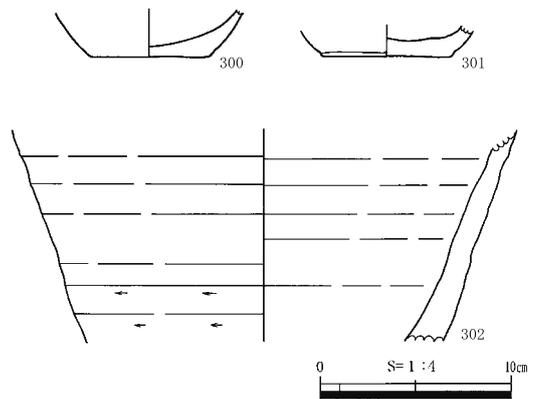
に、製塩土器片も出土しているが、図化できなかった。製塩土器は古代に帰属する資料とみられる。土師質土器皿は、八峠編年中世Ⅲ期に相当し、13世紀から14世紀ごろと考えられる。297は、白磁碗V類に分類されるものである。

遺構の性格は特定できないが、地山面の溝が鋤溝の可能性をもつこと、植物珪酸体分析でイネが、花粉分析でイネ属型、ソバ属が僅かながら検出されていること(第4章参照)から、畑である可能性を指摘することができる。

14 3区整地層(第91・202図、PL.55)

3区北東部の標高56.0～56.2mの谷地形で確認された整地層である。

検出範囲は東西16m、南北12mほどで、一部は北東部の柱穴群にまで及ぶ。近世以降の削平により遺存状態が悪く、本来、さらに広範囲にわたり整地が施されていた可能性が高い。



第202図 3区整地土出土遺物

盤を安定させ、屋敷地内の居住空間を確保しようとしたと考えられる。

15 包含層遺物

3区中世遺物包含層(褐色土)出土遺物(第203図、PL.55・61・62・72)

ここでは、3区北東側に堆積していた褐色土から出土した遺物について触れることとする。

303～307は弥生土器甕で、いずれも弥生V-3様式、弥生時代後期後葉に比定される資料である。308は須恵器坏身で、底部にヘラ記号が施される。TK217併行期、古墳時代終末期のものである。

309～324は中世に比定される土器、陶磁器類である。309・310、313～315は土師質土器で309・310が小皿、313～315が受け口の鍋である。311は須恵質の甕、312は土師質の甕である。316・317は瓦質土器で、316が鍋、317が羽釜である。317は口縁部が内傾し、丸みのある胴部を持つ。318は瀬戸窯製品の折縁中皿で、藤沢編年古瀬戸様式中期Ⅲ期に該当する。319は勝間田・亀山系の甕、320は備前焼播鉢で、重根編年ⅣB期に比定される。321は越前焼播鉢で、口縁端部が凹線状に窪む。木村編年Ⅲ-2新期～Ⅳ1期に該当する。322・323は青磁で、322は龍泉窯系碗DかE類、323は龍泉窯系碗B1類である。324は青白磁の合子である。

S14・S15は凹基式のサヌカイト製石鏃である。S16は火打石で、石材はチャートが用いられている。

F101～F114は鍛冶関連遺物である。F101は流動滓で、鍛冶系となる可能性が高い。F102～F108は椀形鍛冶滓、F109は鍛冶滓、F110～F114は鉄釘である。鍛冶関連遺物はいずれも中世に帰属する資料である可能性が高い。

4区中世遺物包含層(黒色土)出土遺物(第204～206図、PL.55・56・60～62・72・73)

4区谷部の中世遺物包含層のうち、黒色土から出土している遺物について触れることとする。黒色土層は、黒褐色土層の下に堆積した層である(第6・7図)。後述する4区黒褐色土層より、中世以前の遺物を多く包含し、とりわけ調査区南側になるにつれて、弥生時代後期後葉から古代にかけての遺物が多くなることから、本来は、古代以前の遺物包含層であった可能性が考えられる。

325・327～334は弥生土器甕、326は弥生土器壺、335は弥生土器底部である。いずれも弥生V-3様式、弥生時代後期後葉に比定される。

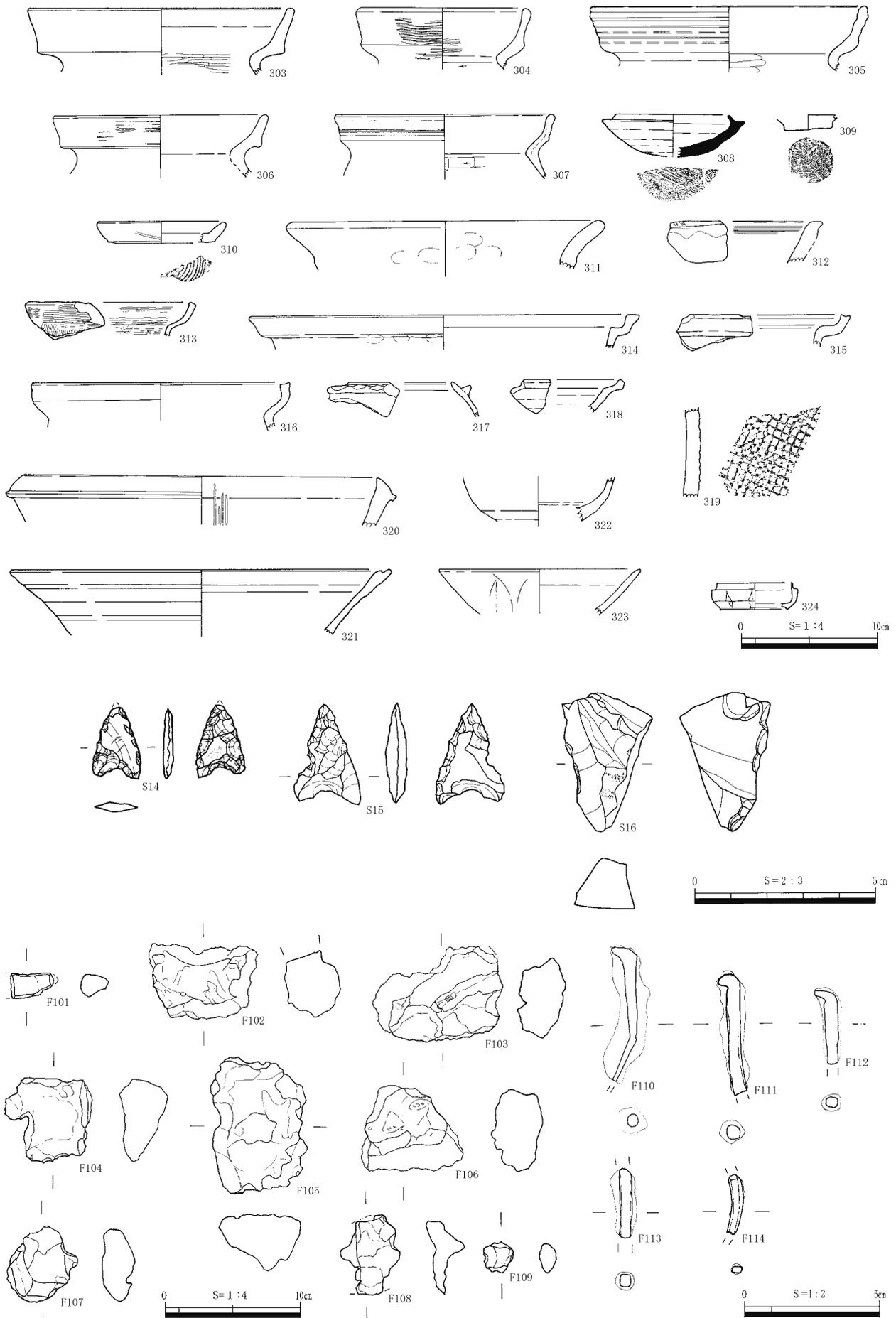
336は須恵器壺、337は須恵器甕、338は須恵器瓶、339は須恵器高台付皿、340～342は須恵器高台坏、343は土師器竈片、344は土師器甕である。奈良時代、8世紀頃に比定される。

345～362は中世に比定される遺物である。345～349は土師質土器小皿、350～355は土師質土器坏、356は土師質土器鍋、357は土師質土器羽釜、358は勝間田焼、359は須恵器鉢、360は須恵質土器甕、361は瓦質土器鍋、362は瓦質土器鉢である。これらは、八峠編年中世Ⅲ～Ⅳ期、13世紀から14世紀頃のものと考えられる。

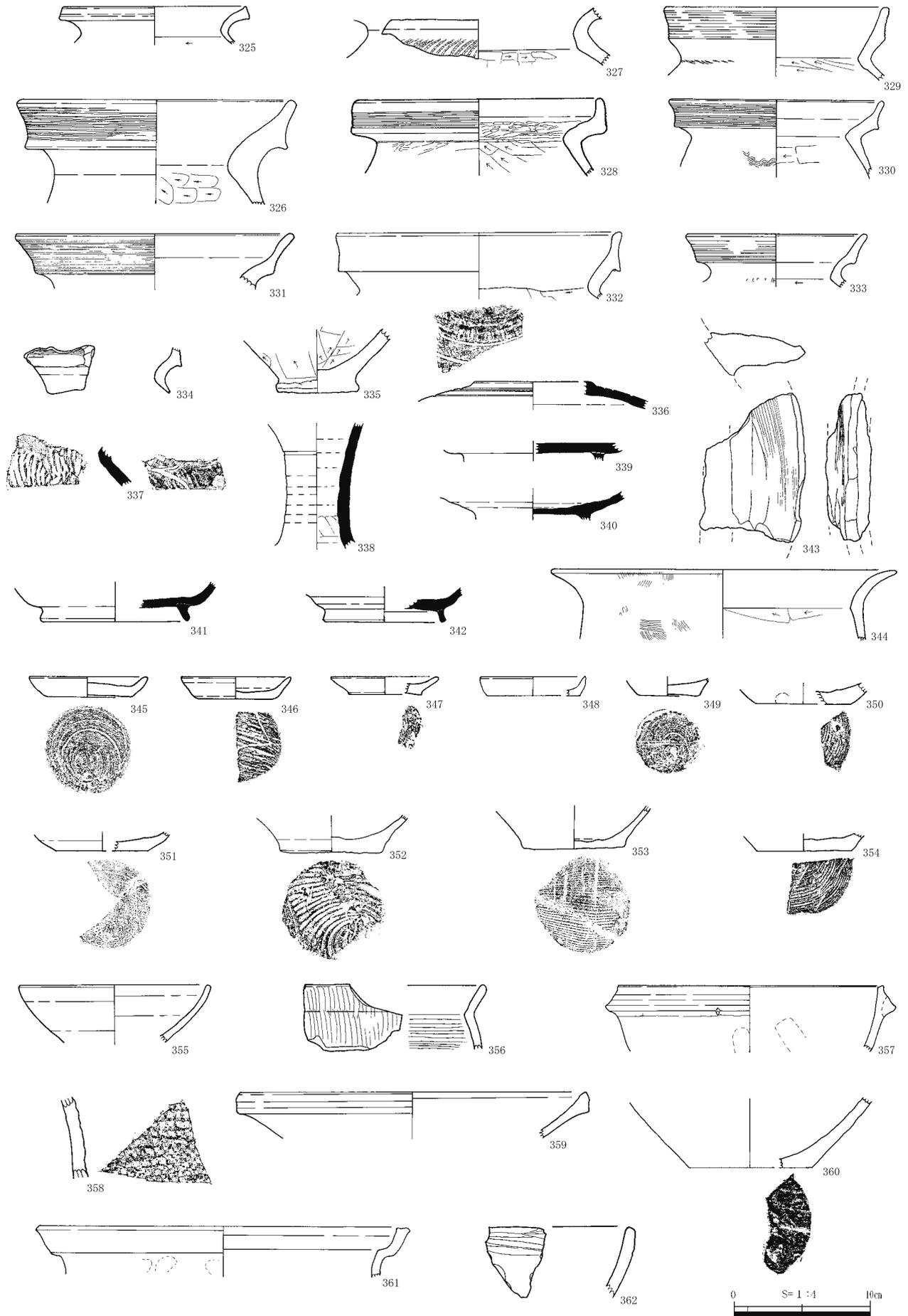
その他、流動滓F115、椀形鍛冶滓F116～F130、鍛冶滓F131～F133、再結合滓F134・F135、刀子136、鉄鏃茎部F137、掛金具と思われるF138、棒状不明鉄製品F139、鉄釘F140、包丁F141・F142、鑄造鉄鍋片F143がある。これらも中世ごろのものと考えられる。

黒曜石製石鏃S17・S19・S20、サヌカイト製石鏃S18は縄文時代、敲石S5は時期不明である。

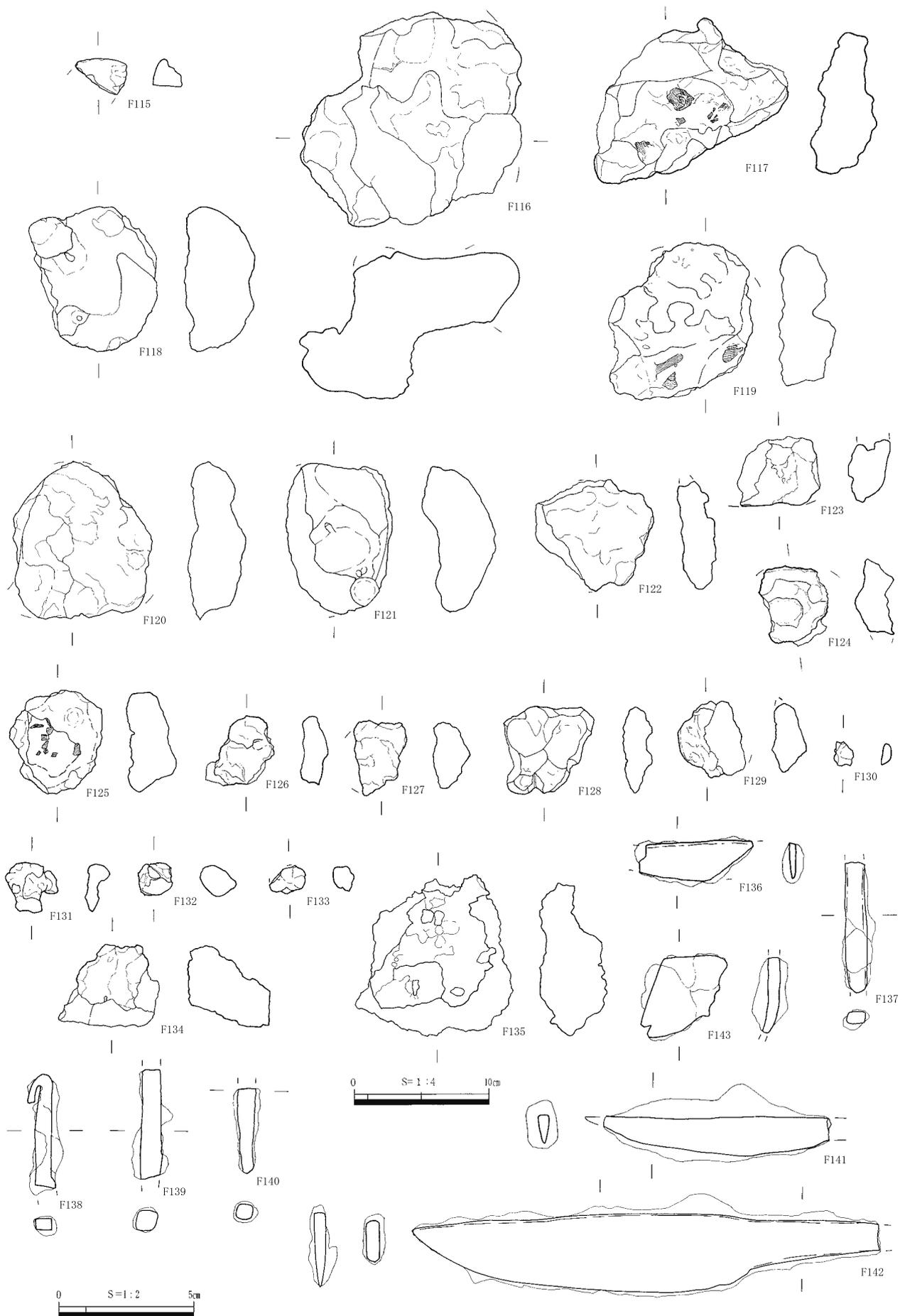
弥生土器や古代の須恵器は4区南側に多く見られる。4区北側では、この層中で14世紀ごろの土師質土器等が含まれることから、黒色土は中世の遺物包含層と考えた。



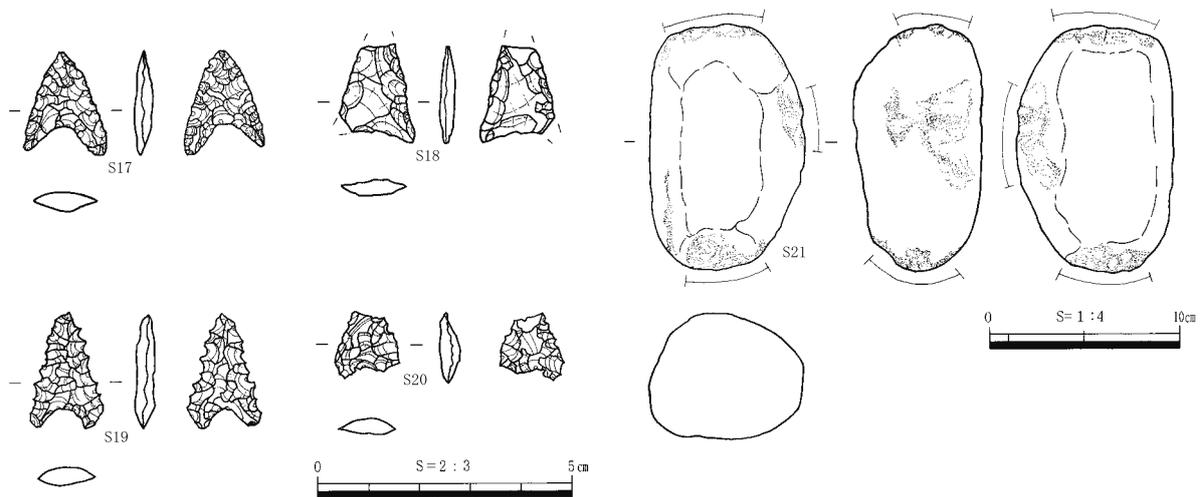
第203図 3区中世遺物包含層(褐色土)出土遺物



第204図 4区中世遺物包含層(黒色土)出土遺物(1)



第205図 4区中世遺物包含層(黒色土)出土遺物(2)



第206図 4区中世遺物包含層(黒色土)出土遺物(3)

土器・石器類とともに鍛冶関連遺物が含まれており、確実な時期はおさえられないが14世紀ごろのものと考えられ、周辺に鍛冶関連施設があったと考えられる。

4区中世遺物包含層(黒褐色土)出土遺物(第207～211図、PL.56～59・62～64・73)

4区谷部の中世遺物包含層のうち、黒褐色土から出土している遺物について述べる。黒褐色土層は、近世以降の遺物包含層である褐灰色土、灰褐色及び暗灰黄褐色土に被覆された層で、色調の違いで4層に細分できる。(第6・7図)

363は縄文土器である。縄文時代晩期ごろの粗製土器片と考えられる。

364～371は弥生時代の土器である。364は弥生土器壺、365～371は弥生土器甕である。弥生V-3様式、弥生時代後期後葉に比定される。

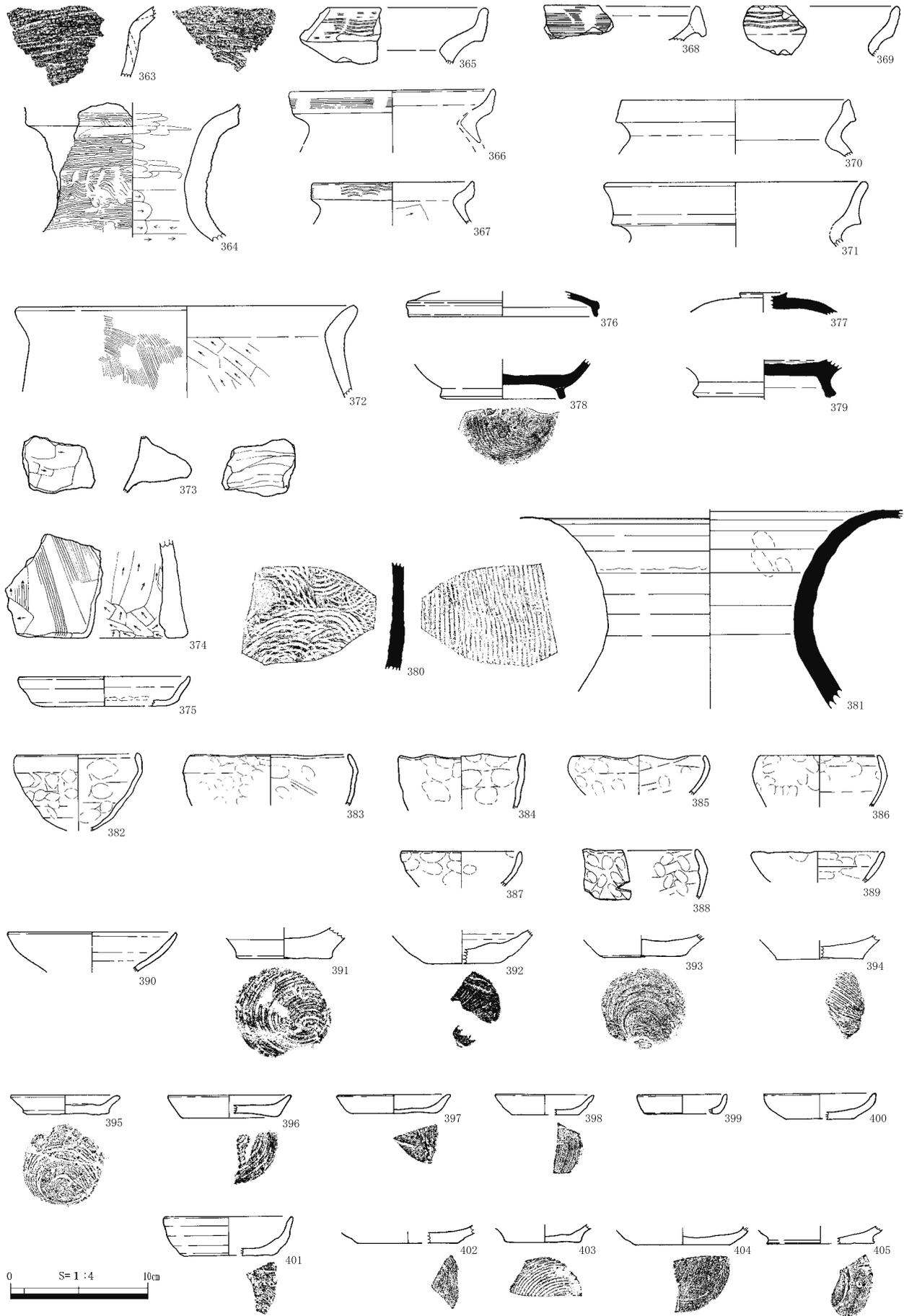
372～389は、古代の土器である。372は土師器甕、373・374は土師器竈、375は土師器坏、376・377は須恵器坏蓋、378は須恵器高台坏、379は須恵器台付壺、380は須恵器甕、381は須恵器広口壺、382～389は土師器焼塩土器である。

390～461は中世の土器である。390～394、401～405は土師質土器坏、395～400は土師質土器小皿、406～419は土師質土器鍋、420・421は土師質土器羽釜、422は内黒土器坏、423・424は土師質土器鉢、425～429は瓦質土器鍋、430～437は瓦質土器羽釜、438は瓦質土器播鉢、439は瓦質土器鍋、440は瓦質土器鉢、441・442は備前ⅣA類の播鉢、443は備前焼播鉢底部、444～447は勝間田焼甕、448～456は青磁碗で448は龍泉窯系碗D類、449は龍泉窯系碗B2類、450は龍泉窯系碗B4類、451は龍泉窯系碗C2類、452・453は龍泉窯系碗D類、456は龍泉窯Ⅰ類である。457は青磁盤、458は白磁Ⅳ類の碗、459は白磁皿D群である。460は古瀬戸後期Ⅲ期の瀬戸窯製品碗、461は古瀬戸後期Ⅱ期の瀬戸窯製品平碗である。463は瓦質土器底部、464～468は土錘、469は土玉である。

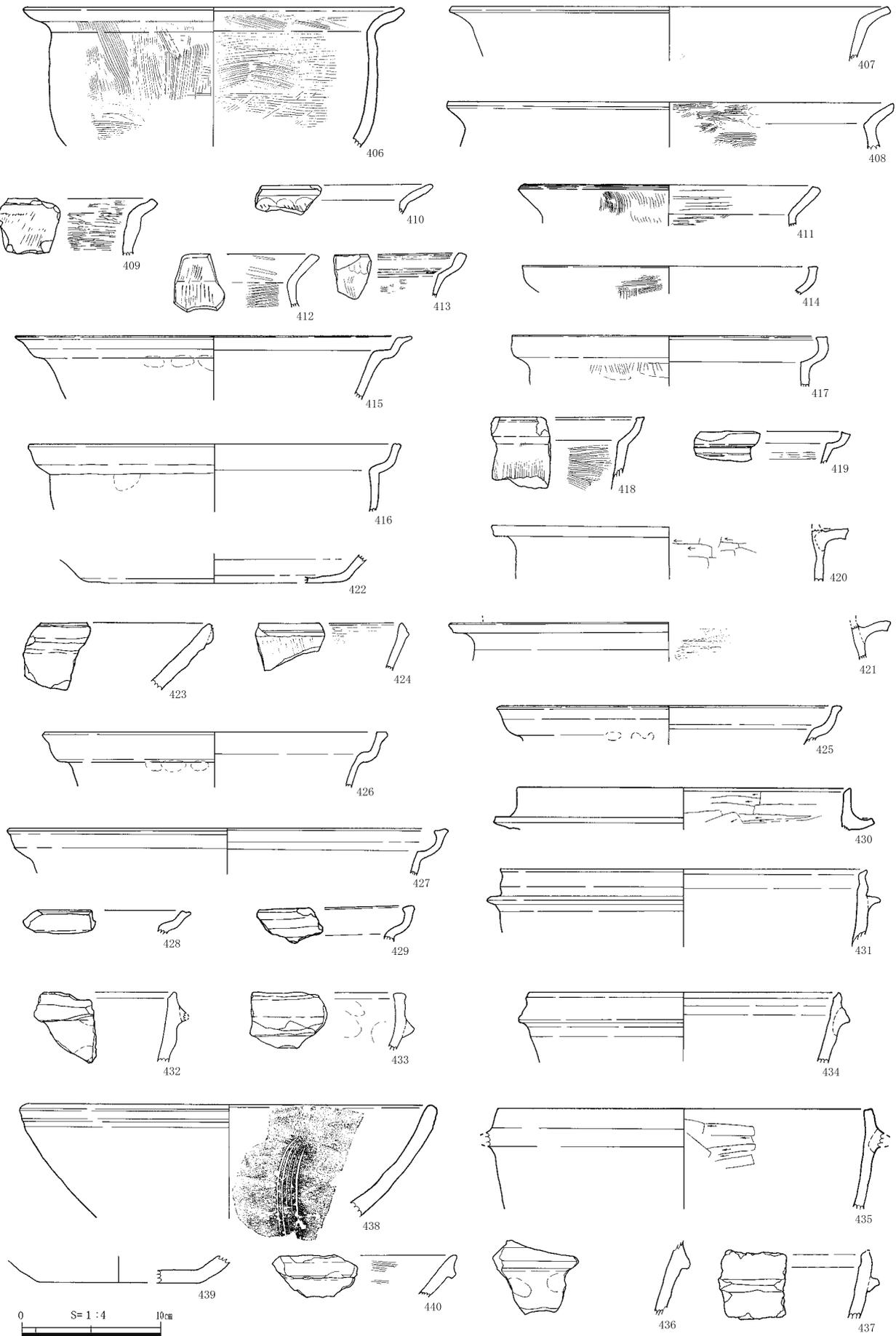
染付け碗 462 は近世以降のもので、混入したものと思われる。

石器については、黒曜石製石鏃S24・S25は縄文時代、砥石S22・S23は形態から弥生時代ごろのものと考えられる。敲石S26の帰属時期は不明である。

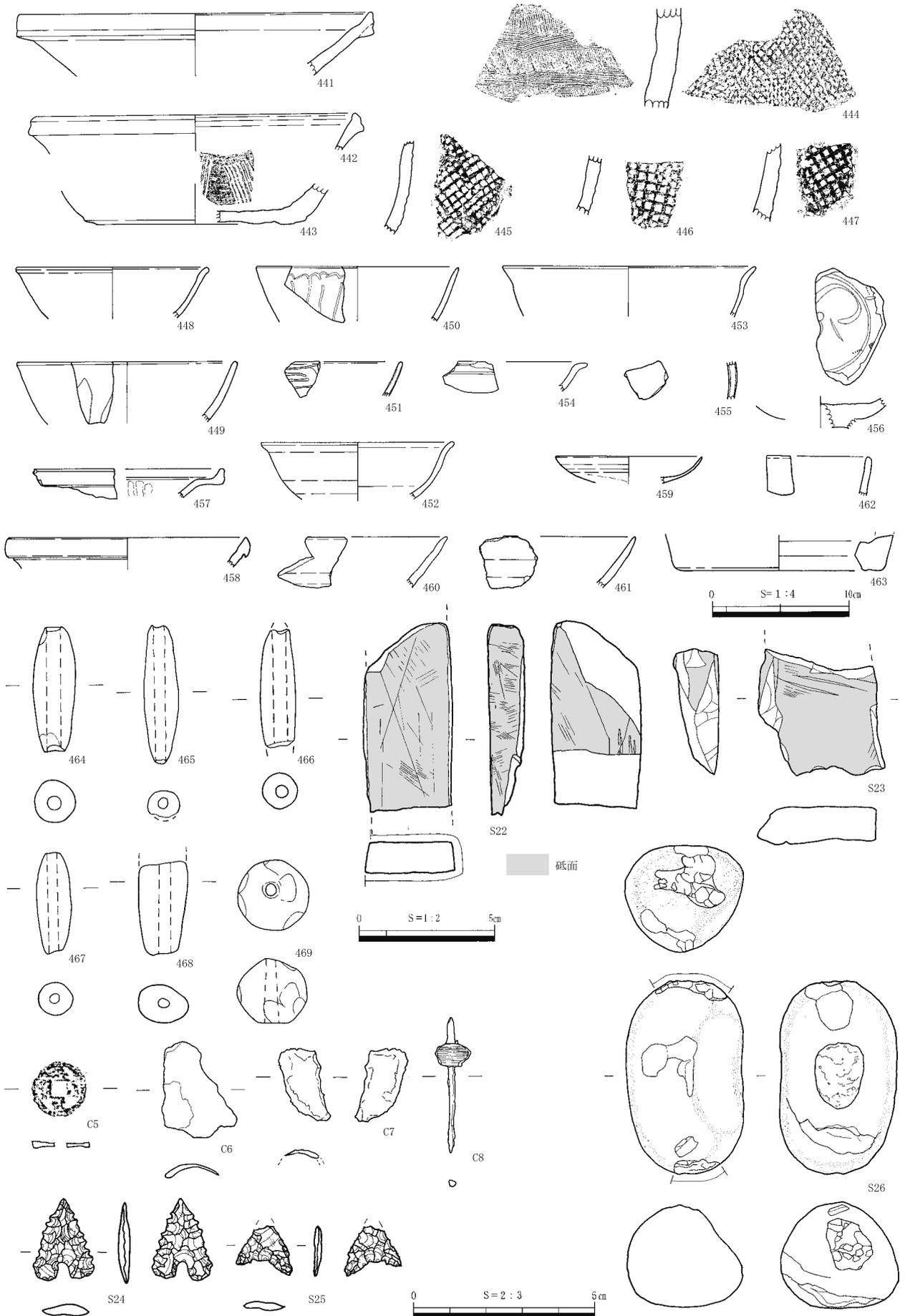
金属製品及び鍛冶関連遺物も多数出土している。洪武通寶C5、不明銅製品C6・C7、棒状銅製品C8、火打ち金F144、鉄鎌F145・F146、鉄製刀子F147～F150、鉄鏃F151、鉄製飾り釘F152、鉄製環状鉸具F153、鉄製楔F154、鉄製飾り金具F155・F156、鉄製折れ釘F157～F160、鉄釘F161～



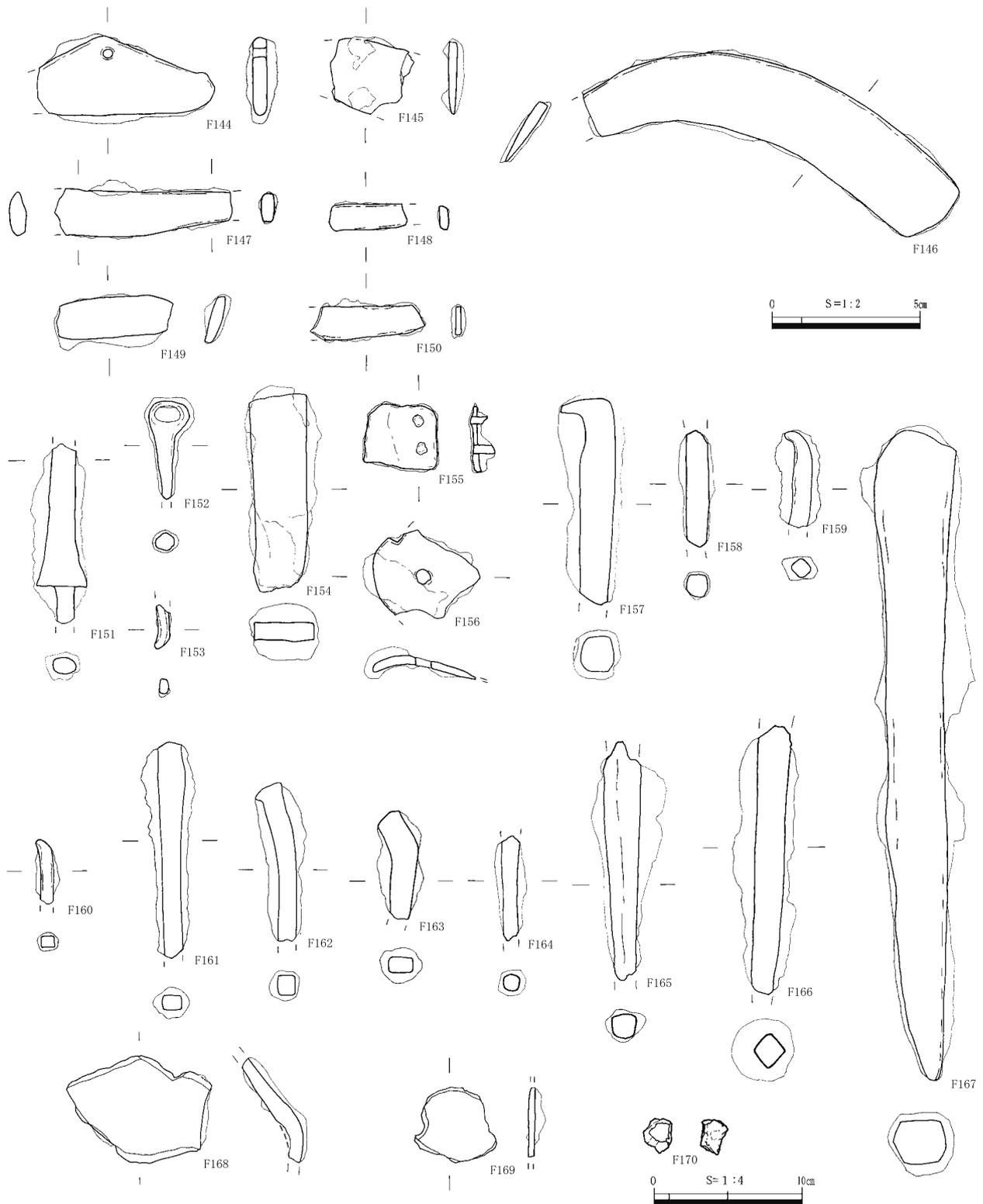
第207図 4区中世遺物包含層(黒褐色土)出土遺物(1)



第208図 4区中世遺物包含層(黒褐色土)出土遺物(2)



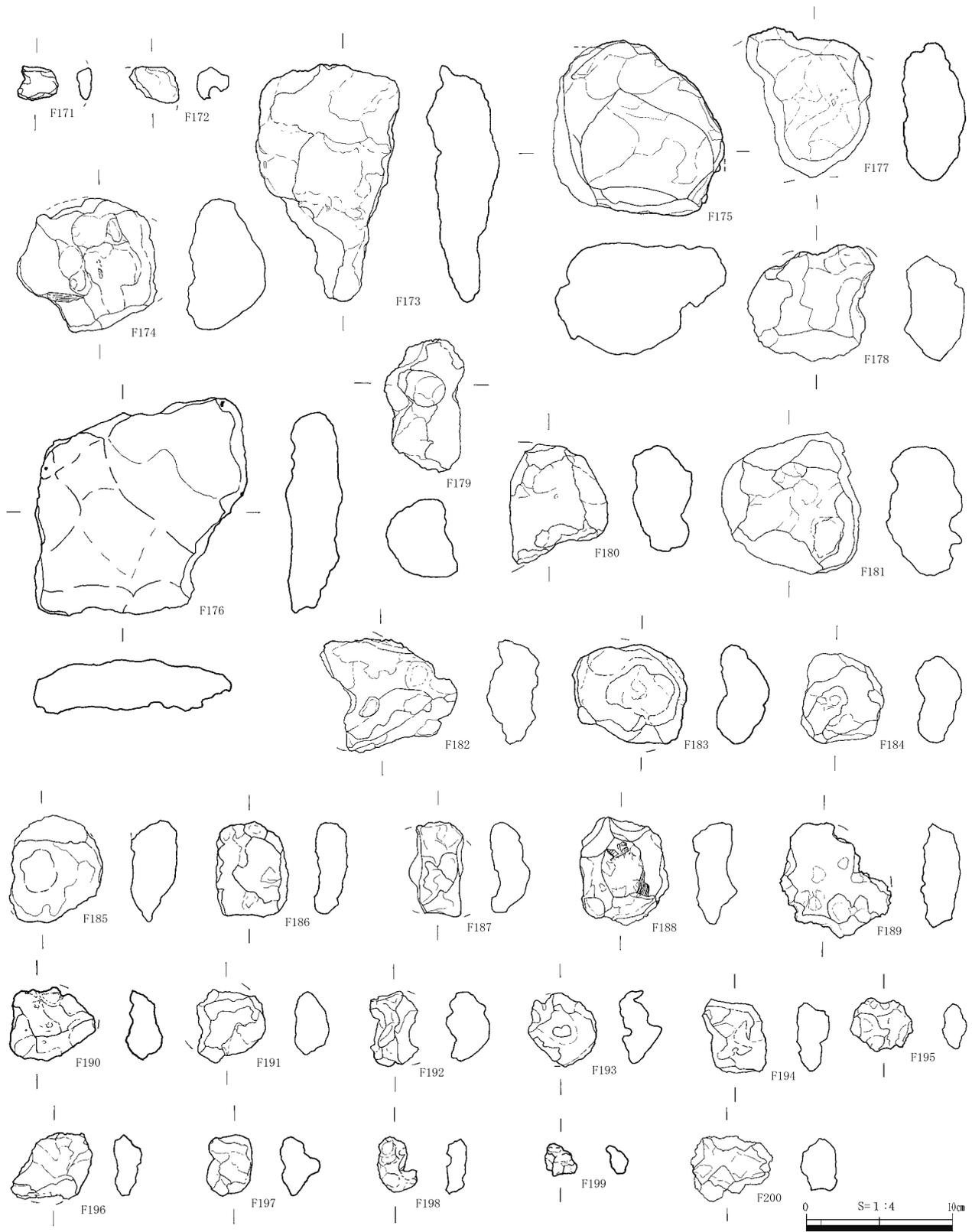
第209図 4区中世遺物包含層(黒褐色土)出土遺物(3)



第210図 4区中世遺物包含層(黒褐色土)出土遺物(4)

F165、棒状不明鉄製品F166、馬鋏刃F167、鑄造鉄鍋片F168・F169、鞆羽口F170、流動滓F172、椀形鍛冶滓F173～F197、鍛冶滓F198・F199、再結合滓F200は、中世の所産であると考えられる。

なお、鞆羽口F171は、1区古代から中世包含層の黒褐色土から出土したものである。



第211図 4区中世遺物包含層(黒褐色土)出土遺物(5)